バカとテストと乙女なお姉さま（ぼく）

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと乙女なお姉さま（ぼく）

【Ｎコード】
Ｎ０９６９Ｍ

【作者名】
神代ふみあき

【あらすじ】
おとボク＋バカテスのクロスものです。
反射的に書き始めましたので、ストーリーもある程度オリジナルです。
原作カップルは破壊しない予定ですが、クロスキャラは出る予定です。

第0話　プロローグ

プロローグ

「・・・死んでください、父様。」
「み、瑞穂、笑顔できついこと言わないでくれ。死んだ幸穂に言われているみたいで、死にそうになる」
「ではもう一度言います、死んでください、父様(へんたい)」

胸を押さえて倒れる父様(へんたい)は、涙目でコチラを見る。

「なぁ、瑞穂。単に行く学校を変えて欲しいってお願いが、何でそこまできつい言いようになるのかなぁ？」
「当たり前でしょぉ！　なんで男の僕が、女子校に入学しないといけないんですかぁ！！」

そう、本日、この場で父親から言われたことだった。

『瑞穂、おまえにはこの学校に行ってもらう。拒否権はない！』

差し出されたパンフレットをみて、総毛が立った。
そこには「女子校」とあったから！！！
端から端までみても「男子」の入学要項はなく、募集も女子のみ。
最低でも男子としてなら、と思ったけれど、追い打ちがきた。
『おまえには、この学校に『女子』として入学してもらう！！』
繰り出された右ストレートで吹っ飛んだ父様(へんたい)を、楓さんが助けお

こしたけれど、僕は追い打ちでパンフレットを投げつけていった。

「・・・死んでください、父様。」

と。

「しかしだな、瑞穂。これもそれもおじいさまの遺言で、この学校に入学しなければ家督は継がせないと・・・」

「・・・本日ただいまより、鏑木瑞穂はこの世から消えました。故に家督を気にする鏑木瑞穂はこの世にはいません。」

父からもらったアクセサリーや腕時計を床に並べる。

唯一、母様のロケットだけは身につけたままでその場を背にする。

「僕は二度とこの家には戻りません。鏑木瑞穂は廃嫡にしていただきたく思います。ではさようなら。」

「ま、まってくれ、瑞穂」

「ああ、言い忘れてました。もう一度言います。・・・死んでください、父様(へんたい)。」

そうして僕は家を捨てた。

未練はあったし家族への愛情がなかったわけじゃない。

でも、絶対にいやだった。

だから僕は、学費が安くてアルバイトを一部許可している「文月学園」入学することにした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「瑞穂、カンバーーーーーク！！」

崩れ落ちるように泣きぬれる当主に向かい、溜息一つのメイド。

「旦那様、どうしてくれるのですか？」

「・・・？」

「旦那様が瑞穂様の『お嬢様』姿を見せてくれると言うから、家人総出でご協力いたしましたのに、家出どころか縁を切られてどうなさいます？」

「いや、しかしだな、あいつの女装嫌いは楓のせいでもあるんだぞ？」

「・・・」

「おまえが、いやがる瑞穂を無理矢理女装させたり着物を着せたり・・・・」

「・・・そんなことより、どうなさいますか？」

「・・・・・きたねー」

「・・・そんなことより、どうなさいますか？」

ぼりぼりと頭をかいた当主は、溜息一つ。

「ま、遺言なんてどうでもよかったんだよ、ほんとは。」

そう、女装などもどうでもよくて、実際は、彼の母親の母親の母校で母親の息吹を感じて欲しかっただけだった。

だから、入学じゃなくてもよかったのだが・・・。

「絶対ばれないよな？」

「・・・ばれませんよね？」

ただおもしろかっただけかもしれない。

第0話　プロローグ（後書き）

てな感じで書き出しました。

一応、原作の戦闘部分や繰り返し部分は皆さん書いていますので、できるだけ飛ばそうと思っています。

ということで、オリジナルエピソードが多くなる事になります。

どんなもんでしょうか？

第一話（前書き）

本編の開始です。

一応オリジナル部分を強調して、原作部分をできるだけスルーする勢いです。

お楽しみいただければ幸いです。

第一話

第一話

桜舞散る坂道を歩く。
去年一年通った道だけど、季節が戻っただけで新鮮に感じる。
母の遺言で、毛先をそろえる以外のハサミを入れていない髪の毛はうっとうしくも感じるけれど、これが母との繋がりだと思うと切ろうという気になれなかった。
たとえそれが、大きな誤解の元だとしても。

「みやのこうじーーーーー、すきじゃぁーーーーー」
「みやのこうじーーー、けっこんしてくれーーーー」
「みやのこうじーーーあいしてるーーーー」

ちぎっては投げ、ちぎっては投げ。

突進してきた三人を投げ飛ばした。
電柱やゴミ箱につっこんで呻いている変態たちを背にして僕は叫ぶ。

「何度も言うけど、僕は男だ！」

『それでもすきじゃーーーー！』

「バカ、シネ！！」

僕のその言葉とともに、周辺から武装した女子が発生する。

男の僕を何故か「お姉さま」と言う変な女子たち。
というか、お姉さまなら「島田さん」がいるのに！！

「お姉さまの命により、バカ三人を排除します！！」
「我らのお姉さまのため、ばい菌駆除を実行します！！」
『はい！　お姉さま！！』

ゴム弾ががバラバラとばらまかれ、三人のバカが気絶する。
・・・これが毎日というのだからイヤになる。

入学するまで知らなかったけど、この文月学園と言うところは変だった。
学力向上を目的とした「試験召還」システムという科学だか魔術だかよくわからない話があって、二年になるとその試験召還獣を使った戦争を出来るらしい。
全く興味がなかったので、一年の時の召還獣研修でも身が入らなかったけど、この前みた明久の試召獣が力持ちなのをみて、一気に興味がわいた。
いろいろと話を聞いてみると、どうも明久の試験召還獣が特別なだけだって事が分かって、興味が半減したけど。

「おお、瑞穂。今日も早いのぉ」
「あぁ、秀吉。おはようございます」

木下秀吉、通称秀吉は、姉の優子さんの双子の弟で、見た目が女の子っぽすぎて男子ファン多数。
学校の行き帰りに男子から告白されたり、近所の中学生男子に告白されたり、近所の小学生男子に告白されたり・・・　不憫すぎる。
逆にお姉さんの優子さんは「秀吉」に間違われて告白されるという行為が山積したため、かなり傷ついてる。

コチラも不憫すぎる。

「・・・瑞穂、なんぞ不穏なことを考えておらんか？」

「ぜんぜん！」

断然考えていました。（きっぱり）

それはさておき、秀吉と歩いていると、なぜか周囲が沸く。

なんで、と小首を傾げたところで「カシャカシャ」と機械音が響く。

気づけば目の前で土屋君がカメラで僕と秀吉を接写してた。

とりあえず足を引っかけて転倒させて、カメラを踏みつぶそうとしたんだけど、倒れた瞬間にその場を離脱してた。

無駄に身体能力が高いのは相変わらずだね、うん。

「土屋君、変な写真ばかり撮っていると『つぶし』ますよ？」

電信柱の陰からでてきた土屋君は、ガタガタと震えながらメモリーカードを差し出す。

僕はパキッとそれを折ってみせる。

「文句は？」「・・・次は見つからない」

はじめからとらないと言う選択をしないところは男らしいのでしょうか？

ちょっと頭痛を感じます。

去年一年、土屋君を含めて明久やユウジが色々と問題を起こしたせいで、ずいぶんとつき合わされたものでした。

いや、そんなドタバタだって楽しかったんですけどね。

わいわいと校門までくると、体の作りが良い色黒の男性教諭が腕組みで立っていた。

「『おはようございます、西村先生。』」

「うむ」

西村先生、愛称鉄人。

趣味がトライアスロンだそうで、その肉体は落ちてきた岩をもはねとばすとか。

人間ですかね？

「木下、土屋、きさまら、もう少しなんとかんらんのか？」

そういいながら二人に封筒を渡す。

二人とも封筒からでてきた紙をみて溜息をついた。

Fと書いてあるのは、振り分け試験の成績が悪かったせい。

先日行われた成績振り分け試験は、二年に上がるときのクラス分けのために行われていて、その結果を封筒でもらっている。

もちろん僕の封筒ももらっていたけど、中身はみなくてもわかる。

何しろ試験を受けていないから。

「宮野小路、ルールはルールだ。」

そう、この振り分け試験は一度しか実施されないので、欠席したり途中退出すると0点に採点されてしまうのだ。

僕の場合、アルバイト先の老夫婦が風邪で倒れてしまい、どうしても店が開けられないと言う情報を得たので、試験をあきらめて代わりに店を開けただけだった。

老夫婦、吾妻夫妻には凄く恐縮されたけど、でもあまり関係ないかな、と思ってる。

勉強なんてやる気があればどこでも出来るし、成績なんてどんな状況でもあげられる。

僕はそんな風に思っていた。
あの教室をみるまでは。

秀吉と土屋君と一緒にFクラスに行くと、想像を超える風景が広がっていた。
吹き込むすきま風、壊れつつあるちゃぶ台、アンコの無い座布団。

「これが教室？」

思わず三人で教室の入り口に戻ってプレートをみる。
一応、2ーFって書いてある。
あるけど・・・・、ねぇ？

とりあえず席順とかがわからないので適当に座ると、入り口が再び開いた。

「・・・うっわーこりゃひでーな」

内容の割には少しうれしそうな口調の坂本ユウジ。
彼こそ、この学年の悪童の一人にして、騒動の中心人物。
昔は神童と言われたらしいけど、今あるのは沈童といったかんじで、救いようがない感じ。

「瑞穂、いま、かなりひどいこと考えなかったか？」

「ぜんぜん！」

もちろん全然考えていました。（きっぱり）

「うわ、きったなーい」

ぞろぞろと入ってくる生徒の中に女子発見。

コチラに気づいてかわいく手を振ってる女子こそ、島田ミナミさん。

ドイツからの帰国子女で、日本語が絡む教科はからっきしという不憫な女子。

「やっほー瑞穂。今日も出たんだって？　ロイヤルガーダー。」

厨２っぽいその名前も口にするのもいやな存在は、僕を「おねえさま」と慕っている女子の集団だった。

ムカついたので島田さんの妹（スール）にメールしちゃおうかなー。

「ま、まった！瑞穂待った。ごめん謝るから勘弁」

全力で手を合わせてくれたので許しますが、次は予告なしですよ？

「・・・瑞穂は相変わらず怖いわ。」

そういいながら僕の隣に座る島田さん。

「ところで吉井は？」

今この時点で居ないなら「F」じゃない可能性もあるでしょうに、と僕が言うと、島田さんは鼻で笑った。

「ふん、そんな奇跡の中の奇跡があるわけ無いでしょ？　瑞穂だって信じちゃ居ないことを言うもんじゃないわ」

いや、じつは「G」クラスとか出来てたら・・・・

そう僕が言ったとたん、島田さんや秀吉たちが急いで廊下に出て周囲を見回した。

やばい、かなりの信憑性があったみたいだ。

「・・・お、驚かせないでよ瑞穂。本当にある気がしたわ」

「・・・わしも、一人だけポツンと教室で正座する明久の姿がうかんでのぉ・・・・」

「・・・涙で前が見えない。」

「えーっと、そのー。一応0点の僕がいるから、それ以下は無いかなーって」

「いや、吉井は自分の名前を間違えて書いて減点されるわ」

「いや、答案の後ろ前を間違えて名前を書いて・・・」

「わからんぞ、あいつなら伝説的なマイナス点を・・・」

「それで『G』クラスか・・・・。」

『さすがだ・・・・』

なんだか本当にGクラスが在るような話になってますね。

暫くすると、そろそろ時間だろう、という頃になっても先生がこない。

「しかたねぇ。」

そう言って教壇に前まできたユウジ。

「じゃ、担任が来る前に、ちっとぶちあげるか・・・」

すっと息を吸った瞬間、飛び込んできた一人。

「すっっみませーん、おくれてきましたー！」

『Gクラスはここじゃねー！』

全員で声をそろえて、なんてヒドいことを言うんでしょう。

「いいだしっぺは瑞穂でしょう？」

反省してます。

半泣きで秀吉に縋る明久はさておいて、そうこうするうちに担任の福原先生が現れた。

施設への泣き事や待遇への不満はすべて「成績のせい」ということでイナされてしまい、みんな不満をためていたが、どうにか出来る話ではないので飲み込んだみたいだ。

「では自己紹介をしてください」

福原先生の声にあわせ、自己紹介が始まったけど、薄ら寒い事態に気づいた。
このクラス、僕や秀吉に告白してきた変態率が高すぎる・・・・。
秀吉にそう囁くと、泰然とした風情で笑う。
「やつらも悪ふざけが好きじゃからな。」
違うと思うよー秀吉。
君の腕に抱かれて甘えている明久(バカ)を筆頭に、うちの学校は奇人変人が多すぎるんだよねー。
「・・・瑞穂、あんたも人事じゃないわよ?」
品行方正、近所では「よいこの瑞穂」で通っている僕が、なぜ?
「そういうところが、吉井たちと五十歩百歩なんだけど、気づいてないのかなぁ・・・・」
失敬な物言いに憤慨したが、それはそれ、ということで自己紹介の続きを聞くことになった。
・・・・・・・・
「はい。わたしは島田ミナミ。得意な科目は数学、不得意はそれ以外。帰国子女だから日本語は苦手です。得意なものは、吉井明久の息の根を止めることです!」
わっと周囲が盛り上がる。
ぎゃーと明久が秀吉に泣きつく。

うーん、みんな明久いじりがすきですねー。

・・・・・・

「はい、僕は宮野小路瑞穂です。僕を女扱いしたりお姉さま扱いした野郎どもは、全力で武っ血ＫＩＬＬんでよろしくお願いします」

教室が静寂に包まれました。

「なにを言ってるんだ、瑞穂！！　君みたいな可憐な乙女がブッチ・・・瑞穂瑞穂、腕の関節はそんな方に曲がるように出来ていなーーーー！！！！」

はい、さいこがんだむ～、これが得意技ー。

と、バカを血祭りに上げたところでみんなの了解を得られたので、僕は座った。

続いて秀吉、土屋君と続き、そろそろ最後と言うところで再びドアが開いた。

「おそくなってすみません！」

ふわふわ髪の美少女、姫路ミズキさんさんだった。

自己紹介で聞いたところによると、試験の日に風邪を引いて途中退出したそうだ。

○点仲間だなーと、思っていたけど、彼女の視線は明久に固定されていました。

うわー、ラブラブ視線。

「あ、あの吉井君、同じクラスですね」
「う、うん、姫路さん。・・・あ、」
「よう姫路、その後の体調はいいのか？」
「・・あ、はい」
ユウジさすが明久いじりレベル１０ですね。
「あ、姫路さん。よかったー、女子がうちだけかと思って、けっこう心細かったんだぁー」
「島田さん、ミズキでいいですよ？」
「うちのことはミナミでいいわ。」
きゃいきゃいと嬉しそうな二人だったが、ふいに姫路さんがこちらに向いた。
「ミナミちゃん。女子はもう一人・・・・」
「だ、だめ、ミズキだめ！」
いやいや、大丈夫ですよ、島田さん。
初犯ですから、初めてですから、ええ。
そんなわけで、懇々と僕の性別が男であることを説明したんだけど、なぜか姫路さんは涙目でした。
・・・・・・・
「そうですか、宮野小路さんは、男の方だったんですね。」
まぁ、一年の頃から女扱いされたり変人たちの主張を聞いている

と勘違いするかもしれないので、仕方ないかもしれない。
秀吉も苦労してるし、この学校の変人率は異常ですよ。

「・・・まぁ、でも、髪の毛はサラサラですし、肌はスベスベですし、睫はパッチリですし・・・・ねたましいですね」
「そうなのよ、瑞穂ってば、男のくせにくびれてるのよ！！」
「なっ・・・なんですって！！！」

なんか凄い視線でにらまれてますよ、僕。
どうしたものかと周囲を見回すと、異常な視線が僕に集中していた。
くっ、これはどうにかしないと・・・。
はっ、そうだ！

「そういえば、明久も秀吉もくびれていますよね」
『なんですってぇ！！』

ほとんど妖怪レベルの視線で島田さんと姫路さんが明久に飛びかかった。

「ほんとです、本当です！　吉井君の腰がくびれてます！！」「なんで！！　男がくびれてるってどう言うこと！！」「ど、ど、どんなダイエットを！！」「なにを食べてるって言うの！！！」

明久は特になにもしてないんだよねー。
主食は塩と砂糖と水だし。
というか、うちで食べる食事が生命線だよねぇ？

「・・・もしかして、吉井。瑞穂の家に・・・・」
「うん、結構泊まりに行くよね？」

「家には何もないんですけどねぇ。」

あははははっと笑う僕らだったけど、なぜか島田さんと姫路さんの視線がキツい。

なんで？

ごたごたとしているうちに、いつの間にかユウジと明久が消えていた。

どこにいったのかな、と思っていたら、不適な笑みでこちらを見ていた。

何事？　と視線を送ると、二人で笑う。

それは、あの、いつもの笑みだった。

騒動を引き起こす時の、あの笑顔だった。

第一話（後書き）

いかがでしょうな？　第一話です。

なんだか必要以上に瑞穂が黒くなってしまいましたが、いい感じなのでこの方向性で行きますw

ご意見ご要望がありましたら、よろしくお願いいたします。

第二話

バカとテストと乙女なボク

第二話

新学期初日にぶちあげられた試験召還戦争は、すでに学校中の噂になっていた。
２Ｆが２Ｄへ召還戦争を仕掛けた、というもので、僕も２Ｆのクラスメイトとして一緒にいたからしっている。

絶妙なアジテーション、クラス内の特化型成績者の紹介、そしてオチ。もちろん明久。

成績の面では確かに明久は「オチ」だけど、実は誰よりも試験召還獣の扱いがうまいのは知られていない。
いや、ユウジはそれも計算に入れているんだろうと思う。
なにしろ、みんなに紹介したのだから。

少なくとも、あそこで紹介したのは前線で戦うのであろう人員だったと思う。
そう、僕も含めて。
とはいえ、最後の試験が０点の僕と姫路さんは回復試験を受ける必要がある。

だから二面作戦となる。

「瑞穂と姫路は回復試験で全科目受けてくれ。およそ二時間で上が

ってくれるとありがたい」
「了解、ユウジ」
「わかりました、坂本君」

D組との試験召還戦争は、いわば練習だと言える。
自分たちの戦力と実力を体感しつつ、どこまでできるのか、何ができるのかを冷静に体感する。
もちろん、そんなことが出来るか解らないけど、それでもユウジは一部の人間だけでも可能にしたいと思っているのだろうと思う。
が、戦力は大いほうがいい。
僕たちは全力で回復試験を受けた。

「・・・ユウジ、戦局は？」

僕の問いに、思わしくなさそうに顔をゆがめるユウジ。

「おお、瑞穂。回復試験はどうだった？」
「こっちは完璧、そっちは？」
「思わしくねぇな。壁がぬけねぇ。」

正面のD組の壁は厚く、Fクラスでは正面突破できそうもない。

「ユウジ、そろそろ授業が開ける。あわせよう」
「・・・そうか、それでいくぞ」
「・・・姫路さん、廊下に生徒があふれたら、人波にあわせて、自然にD組代表に近づいて、勝負を挑んで。」
「え、え、え？」

いかに学校の成績がよかろうと、このての「お遊び」の有能さにはつながらない。
この辺が召還戦争のキモだろう。

「ユウジ、僕と姫路さんが何食わぬ顔で接近。姫路さんは代表を、雑魚は僕が。みんなは僕と挟撃、いいね。」
「・・・いいだろう。指揮は俺が執る」
「了解。」

授業終了のチャイムとともに、僕たちは動いた。

結果は完勝。
雑魚は全滅、D組代表も打ち倒した。
正直に言えば、欲を出さずにこのクラスレベルで止めたいというのが本音だったけど、まぁ、勢いづいたバカは止まらない。
仕方ない流れだった。
ユウジの提案で教室の入れ替えは行われない代わりに、いくつかの条件が提示され、それは相手にも了解された。
どうしても当初の予定を曲げないつもりらしい。

打倒　Aクラス　という目標を。

D組では「何でお姉さまがF組に」とか言っている女子がいたので満遍なく「ウメボシ」を食らわせたのに、逆に喜んでいるのが怪しかった。
勘弁してよ・・・・。
やっぱりこの学校は変人が多すぎる。

戦勝祝いと言うことで、教室に戻った

「で、次はどうするんですか？」

「B組、といいたいところなんだがな、ちょっと気になる情報が入った。」

突如現れた土屋君。

「ムッツリーニ、例の録音を。」

「・・・・（こくり）」

取り出した録音機の再生ボタンを押す。

『・・・いまこそ、我らロイヤルガードの真骨頂！！』

『お姉さまの愛を我らに！！』

『スールシステム導入を現実に！！』

『我らがエルダーシスターを盟主に！！』

「・・・間違えた。」

全力で聞き流す僕でした。

『・・・というわけで、これがFクラスの戦力表ですぅ。』

『そう、姫路、宮野小路、って、オーバーAじゃない！』

『ですが、次の目標はBクラスとの情報ですぅ。』

『・・・なるほど、じゃぁ、私たちは・・・』

『もちろん、その先の判断はお任せしますぅ。』

二人の声は結構知ってる相手だった。
一人はDクラスの・・・・・
「みはるぅ・・・・」
島田さんのベストスール、清水みはるちゃん。
そしてその相手がC組代表小山さん。
つまり、
「Bを狙うとC組に挟撃される？」
「間違いねーな。」
で、さらにはB組の代表は根本君。
背中に「卑怯・卑劣は弱者の妄言」という座右の銘が掲げられていると評判の溝池野郎だ。
そうか、うーん。
「そんなわけで、各個撃破してーが、戦力分散は愚策ちゅの愚策。場外乱闘を仕掛けるっきゃねーな。」
「場外乱闘？　暴力沙汰はまずいでしょ？」
明久の妄言はさていおて、主力注力するのはB組戦だろう。でも、Cクラスは余力で勝てる相手ではない。
つまり実際の試験召還戦争で戦うのはBクラスとしても、Cクラスには戦争をする余裕すら与えないほどに負荷を加えないといけないと言うことだ。
「ま、その辺は明日の回復試験を受けてからだな。各自アイデアを練ってきてくれ」

「へーい、ああ、テストかーいやだなー。」

ぼやく明久のアタマをはたく。

「もう、ちょっとはまじめにやらないと、愛想尽かされますよ？」

「ええ！？　ま、まさか、秀吉、そんなことないよねぇ？　ねぇ？」

あー、もー、この鈍感は、本当にバカなんだなー。

バカを引き連れて帰ろうと玄関まできたところで、

「あ、読んでおこうと思ってた教科書を忘れた。」

極上バカの明久が、教科書を読んでおこうと考えた時点でよい兆候だと思ったので、僕もつきあうことにした。

「え、悪いよ。」

「明久の場合、教室まで行って、ほかのことに気を取られて、そのまま忘れて帰りそうですからね。」

「うっわー、信用無いなー僕。」

「信頼は貯蓄、信用は結果、だよ」

「でたよ、瑞穂の名言集」

バカなことを言いながら、教室まで行くと、誰もいないはずの教室まで行くと、なぜか姫路さんがいた。

手元にはかわいい封筒。

・・・ま、ずいか、な？

僕はゆっくりとフェードアウト。

ま、結果がでると島田さんがかわいそうだけど、あの「バカ」が相手だし、大丈夫だろうね。

第三話（前書き）

お待たせしていました、第三話です。

今回はオリジナル展開、っぽいですが、いまいちですかねぇ？

第三話

バカとテストと乙女なボク

第三話

みんなも先に帰ってしまったし、明久も教室でラブラブ中なので、僕は寂しく下校することにした。
いつもはみんなでガヤガヤ帰る道筋を一人でいると、なんだか寂しい気持ちになるけれど、それはいつもはどんなに満たされているかを思い出させることだった。

なんだかんだと言っても幸せだよね。

そんなささやかな至福を乱す声が響く。

「いや、ちかずかないでください！！」
「・・・お高くとまってんじゃねーぞ！！」

うっわー、なんつうか、前時代的というかなんというか。
見ればスキンヘッドとリーゼントって、何十年前の不良マンガですか。
マンガ喫茶にもおいてないでしょ、それ。
「俺らが声かけただけで「不潔」てなひでぇだろ！」
「傷ついたおれらに賠償ぐらいすべきだろ、な。」
なんて頭の悪い論理展開。

これが、自分と同じ制服を着ているかと思うと、悲しくなる。
だから僕は声を上げた。
「おやめなさい！　慈悲と寛容をもって学習にあたる文月学園の生徒として恥ずかしくないんですか！？」
登場した僕をみて、表情を固める二人。
「・・・やべ、ロイヤルガーダー」
「・・・うわ、まじ、エルダーシスター」
・・・ふっふっふ、その不名誉な名前で呼んだ阿呆はどうなるか知らない訳じゃないだろうに。
ふはははははは。

荒ぶる嵐のような人でした。
タイトな体つきには似合わぬ力で二人の男を投げ飛ばし、数撃拳をたたき込んで気絶させるなんて技を、武道家でも成しえるのかどうか分かりません。
ただ、うっすらかいた汗をハンケチで拭う姿を美しいと感じました。
「大丈夫ですかお嬢さん。」
本人御方がよっぽど清楚なお嬢さんに見えるのですが、この人は、彼は、男性なのだそうです。
ちょっと恨めしそうに私を見る彼が、ちょっと可愛く思えます。
男性全体を苦手としていた私のとって、ひどく衝撃的で運命的に

思える出会いでした。

「あ、あの、助けていただいて有り難うございます。」

「・・・いいえ、うちの学園のバカがご迷惑をおかけしたようですから、当然ですよ。」

とろけるような笑顔の男性。

全く男性に見えませんが。

白く小さな顔、艶やかで腰まである髪の毛、ひらきらとした瞳。

確実に女としての自信を失わせるために存在してます。この人ってば。

見とれていると、倒れていた男達が呻きました。

そろそろ気がつくようです。

どうしよう、そう思ったところで、彼が片手を天に届けとばかりに上げで指を鳴らします。

『ぱちん！』

すると周囲の生け垣から数人の女子が色々な武器を持って現れました。

「御婦人に無礼をする輩はつるされるべきだと思いますが、みなさんはどう思いますか？」

『お姉さまの御心のままに！！！』

まるで軍隊のように統制がとれた動きで、彼女たちは男達をその場から運び出しました。

「あのぉ、男性、でしたよね？」
「あの子達、僕の見た目のせいであんな事を言ってますけど、女子の治安がよくなったって評判なんで、一応黙認してるんですよ」

まぁ、確かに。
彼がうちの学園にきたとしても、何の違和感も成しに「お姉さま」と呼ばれている姿が想像できますもの。
思わず笑ってしまった私を苦笑でエスコートしながら、彼は最寄りの繁華街まで送ってくださいました。
そこからタクシーに乗る寸前で名前を交換しました。

「あ、あの、わたくし、厳島貴子、ともうします。」
「・・・僕は、宮野小路瑞穂。文月学園二年です」

握手していただいたその手は柔らかく、その感触を忘れないように私は自分の手を抱きしめて寝ました。

昨日助けた女の子、厳島貴子さんは二重三重の意味でニアミスな女の子だった。
まず、彼女、厳島と言えば、純粋に実家のライバルで、何かにつけてしのぎを削っている相手だし、彼女の着ていた制服はお嬢様学校と名高き「聖謳女子」、あのへんたいが入学させようとした学校だった。
実際、あんな可愛い子が何人もいるわけはないだろうけど、お知り合いに慣れたのはうれしい。
うれしいけど、うれしいんだけど・・・・。

厳島、かぁ・・・・。

僕個人としては鏑木と縁を切っているつもりだけど、相手の家にとっては関係ないわけで。
逆に絶縁状態の息子なんて格好の攻撃材料なわけだ。
そうなると困るなー。
結構可愛いこだしなー。
知り合いになれたってだけだし、携帯の番号を聞いた訳じゃないし・・・。
ああ、なんだ、まるで接点ないじゃん。
なんだかなー。

捕らぬ狸な思考を終えた僕が教室にはいると微妙な雰囲気が漂っていた。

「ねね、瑞穂。あんた昨日の帰りなんかした？」

おやよー、島田さん。
いつもどおり、ゴミ掃除しただけですよ？
校門に吊ってあったでしょ？

「うっわー、やったわねぇ・・・・。」

聞けば、あの二人の両親はうるさ型で寄付金が多く、猛烈な抗議をしにきているそうだ。
最終的には武装少女隊を停学、僕を退学にまで持っていくつもりだという。

「そっかー、本当にバカだったんだぁ。」

思わず感心して席に座る僕だったが、それと同時に教室の引き戸

が開く。
現れたのは包帯ぐるぐるの怪人。
「はっはっはーー！！　宮野小路、てめーは退学だ、退学だぁ！！！」
「可愛いかおしてりゃ、何してもいいと思いやがって！！」
「ああ、ちょっと惚れてたけど関係ねぇ！！」
「たいがくになっちまえ！！」
『ははははは！！！』
ばか笑いする二体のミイラ。
本当に不快、というか恥ずかしくないのだろうか？
「・・・　強引にナンパして、拒絶されて、格好が悪いから暴力で言うことを聞かそうとして、そのうえ後輩にボコられて。本当なら土下座して『ごめんなさい、ごめんなさい。このことはないみつにしてください。一生の恥なので誰にもしゃべらないでください、おねがいしましゅ』ぐらいのことを言うほど恥ずかしいことなのに・・・」
気づけばクラス中爆笑。
二体のミイラが震えてる。
なんで？
「瑞穂瑞穂、ぜんぶしゃべってた。」
苦笑の明久。
あー、しゃべってたんだぁ。
でもいいよね？

「なんていっても、真実だし」

ニヤリと笑う僕を見て、怒りの余りに飛びかかってきた二体のミイラを、西村先生が現れて取り押さえた。

「・・・F組は自習！　宮野小路は学園長室へいけ！！」

担がれたミイラが邪悪な笑みを浮かべてるのが分かった。

逆転ホームランだった。

学園長室にいくと、そこには昨日の少女がいた。

厳島貴子さんは、昨日の事を学院長に報告し、きわめて丁重なお礼を述べた後、僕の進退に影響がないようにしてほしい旨を言いに来たという。

「聞けば、あの無頼漢の両親が瑞穂様を侮告しているとか。　私個人としましては、そのような些事に瑞穂様の進退が影響されるとは思いたくありませんが、金こそが統べてと猛進している下品な輩のやることはゲスと相場が決まっております。」

一度言葉を切った貴子さんは、僕ににっこりほほえんだ。

「あの無頼漢を切り捨てて生じる損害は、私にお申し付けください。あの程度の小物の寄付金など桁違いで吹きとばさせていただきますわ。」

うっわー、と学園長を見ると、目が語ってた。

（上玉ひっかけたじゃないか。）

面玉が「¥」と「¥」になってるよ。

とりあえず、迎えが来た貴子さんを車まで送った後、再び学園長室へ。

「・・・まぁ、今回はおとがめなしだ、な」

「あの子達も、ですよね？」

「ふふ、あの子達は『ちょっと過激な風紀委員』ということで通してる。」

つまりお咎めなし。

そう理解したところで、学園長がニヤリと笑った。

「ナイスパトロン、げっとだぜぇ。」

肩をすくめて僕は教室に戻った。

第三話（後書き）

第三話でした。

原作つきの癖に、全然動いてくれないキャラクターたち、というよりも原作が面白すぎるのでオリジナル部分が困るというかなんと言うか。

頑張りマース

第四話（前書き）

シロウト小説家は言子力で動いてます。

「がんばれー」とエネルギーを受けると、そのエネルギーで頑張ってしまいます。

すごいですよね、言子力。

第四話

バカとテストと乙女なボク

第四話

朝のバカ騒ぎで回復試験を受け直さざるえなかった僕は、別室で試験を受けていた。

とりあえず、上限無制限でできるだけ点数をあげる方向性で始めたところ、さすがに昼までに力つきた。

それでも、午後も回復試験の続きをしたい旨を西村先生に申し入れたところ、苦笑いで了解してくれた。

で、それはそうとおなか減ったなぁと言うことで、お弁当を回収にいくとFクラスは血の涙にあふれていた。

「どうしたんですか？　須川君」

「どうもこうもない、聞いてくれ宮野小路！！」

聞けば、昨日の段階で明久が姫路さんにお弁当の約束をしていて、その約束履行に屋上へ移動したそうな。

土屋君やユウジ、秀吉も一緒というのだから須川君も血の涙を流そうというもの。

「こうなっては、我々に残っているのは宮野小路の手弁当のみ！！」

「あげませんよ、ばか。実の母親から作ってもらっていてぜいたく言わないでください。」

めんどくさいので切り札を切ると、とたんにおとなしくなる偽装紳士達。
よしよし、しばらく使えますねー、ということで、僕もお弁当を持って屋上に行くことにした。

ナニナニ、この光景。
土屋君が泡吹いてけいれんしてて、ユウジが泡吹いて痙攣してて、秀吉も明久も真っ青。
何事、と思って明久をみると・・・・・。
（姫路、弁当、猛毒）
秀吉は・・・・
（英霊に、敬礼）
えー？
見た目はふつうだよ？
そうおもって手を出そうとした瞬間、姫路の弁当が砕け散った。
みんな目が点になったけど、はじけた後に「ターン」という音が遠くから聞こえる。

・・・やばい、本気で生命の危機だったんだ。

最近お世話になってないけど、僕の周りには某国家警察の特殊部隊だった経歴のボディーガードがついているらしい。
まぁ、家でしたときに契約破棄したはずなんだけど、一生分の契約金をもらってるから、と言う強引な理由で、未だ護衛が続いてるらしい。
で、彼らもそれなりに腕は立つんだけど、かなりヤバイレベルの危険じゃないと動かない契約になっている。

つまり、そういうことなんだ。

「うわ、何か飛んできたみたいですね。」

「残念だけど、落ちてしまいました。」

肩をすくめる姫路さん。

が、内心が表にでている明久と秀吉。

まさに九死に一生をえたというわけか。

「・・・今度は、みなさんに食べてもらえるように、ちゃんとしますね？」

なんでだろう、これほどまでに朗らかな笑顔を怖いと思ったのは初めてだった。

午後も補給試験、時間無制限一本勝負をしたところ、高橋先生に途中で止められた。

鏡を見ると、まるで死霊に取り付かれたような顔にみえる。

「なにかあったんですか？　先生に相談できないことですか？」

いいえいいえ、実際の死の危険を感じていただけです、とはいえなかったので、集中していて気づかなかったことにした。

とはいえ、明久。

姫路さんとつきあうと、毎日ジャイアンシチューか。

「ドラえもんのいないのび太は、一撃必殺の状況ですね。」

思わず苦笑いで教室に戻ると、ちょうどみんなも帰るところだっ

た。

「あ、瑞穂。どうだった？」

「もちろん、ばっちりですよ。」

びしっと明久にグットサインをする僕。

「よしよし、それじゃ、ちょっと作戦会議をしとくか。」

一度座ろうとしたユウジに土屋君が待ったをかける。

「・・・盗聴されてる」

「・・・まずいな」

誰が盗聴してるんだろう？

「・・・ロイヤルガーダーとC組とD組と根本」

つまりみんな変態、と。

「じゃ、誰かの家で、というのはどうじゃ？」

「そうだな、それじゃぁ、明久か、瑞穂か・・・。」

僕たち二人は今一人暮らしなので、みんながよく集まってくる。

明久のマンションはファミリー向けのマンションなので、あっちの方が広くていいんだけど、電気が止まってたりガスが止まってたり。

水道が止まってたときは強制的にゲームを売り払って料金を払わせたけどね。

ちょっとギャンブルだなー。

「じゃ、瑞穂のアパートでいいでしょ？」
「そういいながら、またご飯をたかる気ですね。」
「あはははは。」

びしっと拳をたたき込むと、明久はそれでも笑顔。

「ミナミちゃん、なんだか見せつけられてますよぉ・・・。」
「・・・木下だけじゃなくて、瑞穂までライバルだったなんて・・・。」

あーそこの女子。そんなに困るなら、自宅に呼んで料理でも振る舞いたまえ。
明久は毎日でもやってくるぞ？
貴重なカロリーだもの。

キュピーンと瞳を輝かせる姫路さんと島田さん。
そしてこの世の終わりかのような顔の明久。
・・・なんで？

「瑞穂、おまえ、なにげに恐ろしい事いうのな。」
「・・・あの料理を毎日食べさせる。・・・恐ろしい悪魔」

あ？　ああ、本気で忘れてた。
なにしろ僕は食べてないし。

「だったら、明久が二人に教えれば？　けっこうできるよね？」

おお、と感心する周囲。

「なにげに明久を救う手か？」

なになに、死の淵で喘ぐ親友の付き落としただけですよ。

「・・・？」

「ユウジ、あれだけの強者が、ちょっとしたアドバイスでどうこうなるわけがないじゃないですか。」

「・・・・瑞穂、怖い子」

そんなこんなで僕のアパートでの作戦会議が決まった。

食材を買って帰るのは、自分で作るためであって、ぜったいに料理をさせる為じゃないんだからね！！

第四話（後書き）

いかがでしょうか、第四話です。

思いっきりオリジナル展開が続きますので、ついてきてもらえると嬉しいです。

第五話（前書き）

おまたせしていませんw

というか、四話の続きなので、ほぼ連投します。

第五話

バカとテストと乙女なボク

第五話

築一五年のボロアパート、それが僕のアパートだけど、設計だけはバブルの頃のせいか、わりと良い出来の室内で気に入っている。

そんな部屋の前で鍵を出して回すと、なぜか手応え無し。

「どうした、瑞穂」

「いや、なんだか手応えがなくて。」

「なんだ、鍵をかけないでてきたんじゃないの？」

「・・・そうでしょうか？」

本気でそんな気がしてきたなぁーと思ってドアをあげる。

「お帰りなさいませ、瑞穂様」

ばたん。

あれぇ～？　なんで僕の部屋なのに別世界につながってるんだろう？

もう一度試しに開いてみる。

「本日の夕飯は、軽くしてありますので、足りなければ・・・・」

ばたん。

・・・・もしかして僕は狂ってしまったんだろうか？

「瑞穂、いまのメイドさん、なに？」

「美しい人でしたねー？」

僕の幻覚ではないらしいことは解ったけど、なんで？

なんで実家（うち）の従業員の楓さんがいるの？

部屋のはじっこで現実逃避している瑞穂をおいておいて、僕たちはきれいなメイドさん、楓さんの話を聞いていた。

きけば、瑞穂、結構大きい家の跡取り息子なんだけど、父親と大喧嘩して家でしたそうだ。

で、瑞穂の徹底しているところはそのころからで、戸籍や入転出記録まで操作して行方をくらませたそうだ。

そのため、一年以上たった今になるまで瑞穂の行方を実家は知らなかったらしい。

すごいやつだなー、瑞穂って。

思わずため息がでるほどすごい奴なのに、いまは激しく現実逃避してるし。

「名字を母方にするまでは解っていたんですが、微妙に変名なさっていて、さすがにノーデーターでは解りませんでした」

なんでも、「宮野小路」はもともと「宮小路」という名字で、瑞穂のお母さんの旧姓なのだそうだ。

さすがにそのままじゃ直ぐにバレると思って「宮野小路」に変名したらしい。

こんな微妙な違いでもバレないモノなんだ、と感心する僕たち。

「そのへんは、瑞穂様自身がウチの従業員に好かれておりましたので、ねぇ？」

つまり、これぞという証拠以外は握りつぶしていた、と？

「はい、私に内緒で。」

なんだろう、この、囂々と吹き荒れる黒い気配は。

「だって、楓さんに伝わったら、父様に直結じゃないですか。」

「・・・ヒドいですわ、瑞穂様。わたしがこんなに面白そうなこと・・・いえいえ、瑞穂様の意志を尊重しないわけがないじゃないですか！」

黒い、黒いなぁ・・・・。

復活した瑞穂も絡め、メイドさん改め、織倉楓（おりくらかえで）さんの紹介が行われた。

「初めまして、みなさま。瑞穂様が御捨てに成った女の一人、織倉楓でございます。」

「人聞き悪いですよ、楓さん！！」

「ですが、行き先も告げず、私たちを捨てたじゃないですか？」

「実家と絶縁しただけです！！」

「あらあら、でしたら私ども従業員には教えていただいても良かったのでは？」

「だーかーら、みなさんと父様は直結だって思っていただけですぅ！」

「そんな、こんなにも瑞穂様の事を思っている私たちなのに・・・・。」

なんだろう、瑞穂がここまで遊ばれてるのは始めてみたなー。

「なんだかさ、瑞穂ってば楽しそうじゃない？」

「そうですね、まるで姉妹のようですね。」

そんな二人の言葉に、瑞穂との会話を断ち切って答える楓さん。

「まぁうれしい、美人姉妹だなんて♪」

「誰も美人まで言ってません！！」

「あら？　もしや、ほんとうにもしや、瑞穂様は私がお嫌いですか？」

「・・・そうやって僕をからかう楓さんは嫌いですよ？」

なんだろう、本当に黒いなーこの二人。

楓さんには、強く強く、ここのことを秘密にしてもらえるように約束してもらったところ、従業員各の休みにはこの部屋にきて世話をして良いという約束をさせられてしまった。

それにしても、ここ一年以上バレなかったのに、どこからバレたんだろう？

「ああ、それでしたら、先日瑞穂様がお助けになった厳島様からのお礼状が・・・・。」

なんでも、僕は「宮野小路」と名乗ったつもりなんだけど、彼女は「宮小路」と聞き取ったらしく、母の実家にお礼状が行ったそうだ。

心当たりはないけど、僕の名前は知っていた宮小路家は、そのまま鏑木に転送して楓さんの知るところになったというわけだ。

うわー、禍福は、ってやつだなぁ。

今日窮地を救われた貴子さんに、もっと危険な罠を仕掛けられたんだから。

「ところで、みなさま。本日はどのような御用向きで？」

優雅に紅茶を入れてくれる楓さんに、ユウジたちはにこやかな会話を楽しみながら事情説明。

すると楓さん、ほほえみながら提案。

「でしたら、盗聴されてる先を限定して情報を流し、同士討ちにさせるのが上策でしょう。」

出た、出ました。楓さんの「黒思考」。

「お聞きした話では、そのC組の小山様とB組の根本様はおつき合いがあるようですし、その関係を修復不能なまでに破壊して差し上げれば、十全かと」

うっわー。黒。

でも、みんなもかなり乗る気で、むちゃくちゃなアイデアが出てきたけど、楓さんのアイデアはその上を行くものだった。

「まず、C組に『やっぱ、宮野小路だよなぁ。胸なんかどうせ底上げは友香も同じなんだから、宮野小路につけたほうがにあうし。』

『女はくびれだよなーくびれ、たまんねー』とかいう根本様の台詞を聞かせ、B組には『全てはお姉さまのために！』という小山様の台詞を入れれば、ほぼ自滅かと」

声は秀吉ができる、と聞いているとか楓さん。

あまりの黒さに引いていた僕だったが、ユウジは子供のようにキラキラした瞳をしていた。

そう、憧れの存在をみるかのような瞳。

「すげーっ、瑞穂の黒さの根元をみた気がしてたけど、ヤバいラインの根元でもあったんだ！　すっげー！」

・・・・ユウジ、君とはもう少し本気で語り合おうと思うんだけど、どうかな？

という話はさておき、今後の方針が決まった僕たちは、楓さんの手料理に舌鼓を打った。

久しぶりの楓さんの料理は、かなり、その、懐かしかった。

母の味なんか知らない僕にとって、楓さんの味こそが母の味だったから。

第五話（後書き）

さて、ふたたび原作キャラが登場です。

個人的に楓さんは「黒」なので、違和感が少ないのですが、この作品の楓さんは当主よりも瑞穂萌えですので、当主への比重は低いのですw

第六話（前書き）

お待たせしました。
第六話です。

第六話

バカとテストと乙女なボク

第六話

暗黒の魔女の方策は気味が悪いほどハマった。

B組に例の内容で音声を流出させたところ、何故かB組内で反乱が起き、根本君(へんたい)が袋叩きになっていたところで、C組からB組へ開戦が持ち上がり、即日開戦、C組の勝利で決着していた。

これによりB組開戦した際のC組への懸念はなくなったんだけど、その際にC組小山さんが叫んでいた言葉が怖かった。

「お姉さまを汚す毒虫は死になさい！！」

・・・こわっ。

つうか、小山さんも「そう」だったんだ。

本当に怖いよ、この学校。

B組の掃討を終えたC組から「B組及びC組」の不戦条約を得たぼくらは、ようやくA組に挑む準備を始めた。

「ところで、B組に情報を流したのに、なんでC組が攻めていったんです？」

作戦ではB組の内紛はなかったんだけど。

「・・・ミス」
「なにを失敗したんですか、土屋君」
ちょっと言い淀んで、土屋君は視線をはずす。
「・・・C組に流すはずの録音を、BC組同時に両方に流した」
うっわー。
「・・・B組は『このクソ変態は許せない』という反乱。C組はロイヤルガードの先導と洗脳。」
うっわー、本当にウチは進学校ですか？
とはいえ、両方から不戦を約束できたのは出来すぎ。
「いやいや、師匠の作戦道理だろ？」
ユウジ、きみはいつの間に楓さんに弟子入りしたの？
「瑞穂、おまえ、弟弟子として言うが、あの方は敬うべき師匠だぞ？」
弟弟子？　師匠？　おいおいおい。
もしかして変な薬を決めてませんかぁ？
いけないいけない、ユウジの目がグルグルしてる。
洗脳だめーーーー！
「洗脳？　バカを言うな瑞穂。俺が洗脳されていれば、師匠の言うとおりに『瑞穂様』と呼んでいるだろう。しかし俺は瑞穂を瑞穂と

呼んでるし、靴をなめろといわれれば・・・」

どりゃ、チョップ、斜め四十五度！！

「・・・は、今までおれなはなにをしていたんだ？」

やばいやばい、本当にあの人は怖いなぁ・・・。

とかなんとかしていたが、早々に状況を把握したユウジはクラスを掌握してA組への戦いを宣言した。

が、

「そこまでよ、Fクラス！！」

そこに現れたのは、女装の秀吉・・・・・

「そこ！！　いまにか不穏なことを考えなかった！？」

「いいえ、ぜんぜん」

真っ向から考えていました！（きっぱり！）

「まぁいいわ。」

きっと視線を強めた木下さんは、ユウジを睨みつけています。

びしっと指さして高らかに、

「A組がF組に試召戦争を申し込みます！！」

思わずどよめくF組。

なにしろこれから作戦、というところでの宣戦布告だったから。
とはいえ唯一、ユウジだけは不適な笑顔。
「おいおい、こっちは成績不良のボンクラ集団だぜ？　御優秀なＡ組のみなさんが、なにを好んでそんないじめみたいな事をするってんだい？」
事実、Ｆクラスが正面から戦っても勝てる要素なんてありはしない。
だから肩をすくめるユウジ。
それでも超余裕。
「・・・受諾条件は？」
さすがＡ組。
こちらの意図を理解したようだ。
なにしろこの戦争は実際の戦争とは違って、双方の受諾が必要になるのだから。
「対戦は一対一、科目選択件はこっち。もちろん、今の成績でこっちは受けるぜ。」
「なっ！！！」
実に一方的な条件に目をむく木下さんだったけど、背後の女子が一歩前にでる。
「・・・対戦は五対五の全五戦、科目選択がそっち3、こっち2でならうける。」
「代表！！」

一歩前に出たのは、A組代表、霧島翔子さん。
学年主席の才女だ。

「いいだろう。こっちの五人はソレなりにわかるだろうけど、そっちの五人はいいのか？」
「・・・いい。かわりに勝ったときの戦利品を確認」

A組は、代表の言うことを一つ聞く。
F組が勝った場合は、施設交換、になった。

とはいえ「言うこと」って何だろう？

視線の端で、土屋君（ムッツリーニ）と明久（バカ）が囁き合って鼻血を出してるけど、どうせろくな事ではないだろう。
まったく。

かくして、A組との対戦が決まった。

僕らはその準備を開始した。
でも、その前に準備することもある。
勝った場合と負けた場合の双方で検討すべきだ。
だから・・・・

「そうそう、ユウジ。対戦から僕ははずしてくださいよ？」
「・・・おいおい、戦力の要だぞ、おまえ。」
「ユウジ、対戦に参加していないメンバーでEクラスに勝てますか？」

その一言を聞いて、ユウジは顔をしかめた。

「・・・そういうことかよ。まったく、やっぱり黒いな瑞穂は」

最悪の最悪は常に考えるものですよ？

もちろん、最後の手も打っておきますけど。

第六話（後書き）

予告どおり、原作＋みんなが書いている部分は完全スルー方針ですw

オリジナル要素はそれなりに、ということで。

次回もお楽しみに

第七話

バカとテストと乙女なボク

第七話

・・・・・・・

結論から言えば、

・・・・・

F組の机はミカン箱になり、担任は福原先生から西村先生になりました。

・・・・・

戦略は良かったんだけど、実際の戦闘がまずかった。

二勝二敗で漕ぎ着けた決戦で、ユウジが完全完敗で負けたのが敗因だった。

科目を小学生歴史問題に絞ったり、上限百点に絞らせたり、相手がミスすることが完全に決まっている問題を用意したりと様々な手段を講じたのに、本人が百点取れないってどういう事？

「・・・まさに、これが俺の実力だ」

「ころさせてぇー！　このバカを殺させてぇ！！」

「吉井君、おさえておさえてぇ。」

姫路さんに後ろから抱きつかれて静かになった明久が、徐々に前かがみになってゆく。
それをなにを勘違いしてか、姫路さんはもっと抱きしめる。
明久はすでに立っていられない。
土屋君（ムッツリーニ）は、鼻血を流しながらカメラで連写。
「じゃ、約束」
そう言ったA組代表の言うことは・・・
「ユウジ、恋人になって」
そう、霧島さんの願いは、ユウジと恋人になること。
「・・・宮野小路や吉井と浮気は許さない」
って、明久はべつとして、僕はユウジと何の関係もありませんよ!?
「僕だって、そんな関係はない!!」
叫ぶ明久の声を聞いて、うんうんと頷く姫路さんと島田さん。
「・・・恋人だと？　まだあきらめてないのか・・・。」
聞けばユウジ、霧島さんとは幼なじみだったとか。
その際に色々とあって、霧島さんがユウジを好きになったという。
その場でゴチャゴチャとしてたけど、最終的にはユウジが霧島さ

んに連行され、明久が姫路さんと島田さんに連行されて幕を閉じた。
試験召喚戦争とは名ばかりのお遊びは、双方共に施設交換やルール徹底がなかったため、戦争終結は「途中終了」という形で落ち着いた。
ただ、戦争会戦の責任を取り、Fクラスのみ施設のランクダウンが行われる。
ちゃぶ台の下が、みかん箱とは恐れ入る。
そんなこんなで、みかん箱クラスの毎日が始まる。

はずだった。

A組戦が開けた翌日。

「E組が、F組に試召戦争を申し込む！！」

何とも空気が読めない奴らが登場した。

「・・・あー、はいはい、無視されたくなかったんですねぇ？」

空気が読めなさそうな可哀想な人たちに同情しつつボクが相手をしていると、さすがに相手も切れてきた。

「・・・貴様等が雑魚ばかりなのは良くわかっているが、ここは一つ、我々の鬱憤ばらしのために・・・」

そりゃねー。

唯一の格下であるＦクラスに無視されてＤクラスと戦争されて、さらには無視の無視がつきとおって、戦争終結じゃぁ、つまらないんだろうねぇ。

とはいえ、空気読めなさすぎ。

「ユウジ、僕が受けますよ？」

「あー、かってにやってくれー」

すでに愛の奴隷となったユウジは、昨日のデートの疲れで突っ伏している。

さてさて、彼らには彼らの言うＦクラスの予備戦力の実力に恐怖してもらいましょうか。

「では、宮野小路瑞穂が、Ｅ組全員に対して総合科目で試験召還を申し込みまーす」

監督教員はもちろん我がクラスの担任の西村先生。

「・・・な、なにぃ！？」

「いや、しかし、あのＡ組と対戦した後だ。いくらオーバーＡクラスの宮野小路でも・・・・」

なんだ、本当になにも調べてないんですね。

「あ、そうそう、僕はＡ組との対戦に出てませんよ？」

試験科目　総合

Ｅクラス総合点　・・・・　６３００点

「おお！　これなら・・・・」

Ｅクラスの成績をみて、彼らは少し安心する。

何しろ、この点数を越える個人成績などありはしないだろう、と思えるから。

先日のＡ組戦の総合科目の最高点も、４５００点だったし。

とはいえ、予備戦力というのがどういうものかを理解してもらおうと思う。

宮野小路瑞穂　・・・・・　７２６５点

「「「「「なんだとーーーーー！！！」」」」」

先日の補給試験のときに、上限なしの無限テストを受けていたので、一科目千点を超えているのが原因だ。

戦争って、常に「予備戦力」が全てを決するのですよ？　・・・Ａ組にはまけましたけど。

「では、ふきとべ～♪」

召還フィールド一杯の召還獣たちが、一瞬にして消え去った。

「おおぉ～、まるでゴミのようじゃのー」

秀吉の感想は置いておいて、瞬殺で終わったＥ組戦。

もちろんアレは行った。

「そんなわけで、設備こうかーん」

世にも恐ろしい最悪環境での生活は回避された僕たちだった。
逆に言えば、空気さえ読めればよかったんですよ？　E組のみなさん。

追記　：　担任までは交換されませんでした。

第七話（後書き）

第七話です。

いかがだったでしょうか？

原作のテンプレ部分を極力排除してみたら、こんな感じになりました。

一応一巻の内容のおおよそはこれまでです。

ご意見ご感想をお待ちしてます。

第八話

バカとテストと乙女なボク

第八話

戦争集結によって、三ヶ月間は試験召還戦争は行えない。
ほんとうなら、夏休み前までの間でジリジリとタイミングを牽制しあう時期らしいけど、すでに僕らはその時機を失った。

まぁ得たものはある。
なにしろEクラスの設備とはいえ、扇風機とストーブはあるのだから。
今や元々のAクラスに負けたFクラス設備は、冗談のように基準以下の設備となって、今では「G」クラスと呼ばれており、先日の冗談が冗談ではなくなっている感じがある。

まぁ、Gに女子がいないのがせめてもの救いだと思う。
・・・あ、いやいや、「E組」だった、うん。

「まーた、お主は黒いことを考えておるな？」
「いやいや、まったく。」

真っ向から考えていました。（きっぱり）

「しかし、いいのかのぉ？　E組にはかわいそうすぎるのではないかのぉ？」

ちょこっと小首を傾げて秀吉が校舎を見上げる。
そこにはまるでハリボテのセットのような元Fクラスがあった。
校舎内の教室では悪くでききらないということで、わざわざホッタテ小屋をたてたという念の入れよう。

で、そこにわざわざ攻めにくるんだから、目も当てられないバカなわけですよ、やつらは。

「秀吉、同情は相手をかえって傷つけるもんですよ。」
「そのとおりだ、秀吉。俺たちはバカだが、それなりに覚悟と作戦をもって戦った。しかしあいつ等は、なにも準備せずに戦った。この差が今の状況だ。あいつ等だって反省して、次に生かすだろ？」

とはいえ、ボク達の代わりに、あの施設を使ってくれるんだから感謝しましょう。

「「「なむなむー」」」

「祈るなーーーー！！」

ああ、Gクラスのみんなが叫んでいます。

「瑞穂、瑞穂、『E組』だ」

・・・？　ああ、また言ってましたね。
まいったなー。（笑）

「黒い、黒いなー」
「黒い、黒いのー」
「誉めてもなにもでませんよ？」

「「誉めてない誉めてない」」

そんなバカなことを言いながらげた箱にいくと、なぜか明久が居ます。

「ユウジ、僕は今日疲れているのかもしれません」
「・・・・何でだ？」
「明久の幻影が見えます」
「・・・・俺にも見えるな。」
「・・・・わしにも見えるぞ」

「「「そうか、これが集団幻覚（じゃな）（ですね）」」」

「もー！　僕だってたまには早起きぐらいするってばぁ！！」

いじりがいがあるなぁ、と感心しているところで、真実を透かしてみることができた。

「・・・水すら止められたので、空腹を誤魔化すことができず、学校の水でお腹を膨れさせる、そのつもりですね！！」
「ぎゃー、何でそんな事を知ってるんだよ、瑞穂！！」
「・・・・勘で言ってみればまたそんな生活を・・・・抜き打ち売却決定ですね」
「いーやー！！」

両手で頭を抱えてしゃがみ込む明久の頭の上に、ひらりと何かが落ちてきた。

「なんですか、これ？」

ピンクの封筒。
ハートマークのシール。

「・・・らぶれたー？」
「「「ラブレターーーー！！？」」」

ぐわしっ　と封筒が奪われた。
懐にしまってダッシュする明久。
それを追うユウジ、土屋君（ムッツリーニ）、須川君たちＦＦＦ団御一同様・・・
って、いつの間に？

「裏切り者には・・・」
「「「「死を！！」」」」
「教義に反するものは・・・」
「「「「地獄を」」」」
「安らかに死なせるのではないぞ！！！」
「「「「おお！！」」」」

なんだろう、徐々に数が増えてる気がするなぁ。
いつのまにかＦＦＦ団の数がクラスの総数を超えてるし。
分裂でもしてるんだろうか？

「・・・てな、ひどいめにあったんですよぉ・・・・・。」

学校をひけて、久しぶりに家にタカリにきた明久は、こちらもたまたまメイドに来ていた楓さんに愚痴をこぼしていた。

「まぁまぁ、それは楽しい経験でしたねぇ。」

おかわりをヨソって明久に渡す楓さんの笑顔がまぶしい。何かよからぬ事を考えている証拠だ。

「良い経験って！　どうみたって災害ですよ！？」

「吉井様、あなたは少し考え方が浅いですよ？」

すっと楓さんは右手を明久の前にかざす。

ぴっと人差し指をたてつつ口を開いた。

「まず、第一に。吉井様がラブレターを貰ったことを怒って追いかけ回す男女がいる。つまり、異性関係ばかりか同性関係でも発展できるという査証、すばらしいですね？」

「ぜんぜん嬉しくありませんよ、ええ！！」

「第二に、奪ったラブレターを躊躇無く破り去ることができる異性がいる。つまり、その嫉妬は世間の常識を越えて独占欲にまで高まった愛であるという事。ヤンデレ素晴らしいですね？」

「・・・何でそんなに怖いことを言うんですか、明日から姫路さんをみられませんよ、主に怖くて！！」

「第三に、破り去られたラブレターを燃やしてまで消し去ろうとなさった坂本様、これは愛です、ＢＬ的に。ＢＬ素晴らしいことですね？」

「うわーん、何でみんな僕のことを本物だって言うんだぁぁぁ」

本泣きで僕に縋る明久をなでながら、楓さんをにらむ。

「もう、明久をいじりすぎですよ、楓さん」

「・・・あああ、素晴らしい構図です。シャメシャメ」

本当にこたえないなぁ・・・・。

まぁ、いろいろな話はさておいて、半泣きでもご飯を食べるのは明久らしいかな。

翌日、そんな話を教室でしたら、島田さんと姫路さんに凄まれた。

「・・・瑞穂、そんなところでちゃっかり点数かせいで・・・。」

「・・・宮野小路君はヒドいです、陰に隠れてそんなところで・・・・」

いやいやあのね、うちに明久(ばか)が来るのはデフォルトだから、あんまり気にしなくても・・・。

「事実婚宣言なの・・・・!?」

「大胆すぎます・・・・!!」

おーい、ちょっと飛躍しすぎだってば。

事実もなにも、結婚できないでしょ、僕ら男、おーとーこ。

こんなに言葉を尽くしても、相手に理解を求められないと言うのは悲しいことだと思うけど、最後には実力で理解して貰う予定だし、良いか。

「あ、そうそう、昨日うちに楓さんが来てて、明久にいろいろと入れ知恵してたよ?」

「「!?」」

「じつは男女ともにモテモテだとか、ラブレターを破かれるなんて独占欲が強いとか・・・・。」

真っ赤になる二人。
ふっふっふ、切り札ではないのですよ、これは。
もちろん、最後お手段はおいておきますが。

微妙に周囲を意識する明久と、意識されていることを意識している島田さんと姫路さんを堪能しつつ一日を終えたつもだったんだけど、中断された。

『2ーF　宮野小路瑞穂、学園長室まで』

片づけをしていたF組のみんなと別れて学園長室にいくと意外な人が居た。

「みーずほちゃん、おひさしぶり！」

がばっと飛びかかってきたマリヤをスルリと避ける。

がばっ、するっ、がばっ、するっ、がばっ、するっ、がばっ、するっ・・・・・・

「みーずーほーちゃーん。ここはひとつ、幼なじみの再会の挨拶をさせなさいよ・・・・。」
「・・・やだよ、絶対にくすぐるじゃないですか。」
「・・・それは瑞穂ちゃんが感じやすいのがイケないんだよ・・・・」
「絶対にいやです」

そんな会話の応酬の中、学園長が咳払いをしてくれたので仕切り直し。

「ところで、なんでマリヤがいるんですか、学園長」
「・・・御門さんはね、いろいろとぶっちゃけて言えば、秋に行われる聖應女学院の文化祭招待チケットを提供してくれたんだよ」
「ほら、このまえ貴子を助けてくれたのって、瑞穂ちゃんでしょ？
貴子って私の学院での幼なじみでさ、ずっと夢見心地でノロケてるから、だったら学院祭に呼べばいいって話になってね、じゃぁ、ついでに文月にもって話になったのよ。」

びらりと広げられた招待チケット。

「はてさて、どうやって配れば良いかね？」
「・・・では、学園長。校内投票で優秀な出展、優秀な出店、優秀な企画、あとは召還大会優勝者というのはどうでしょう？」

僕のその言葉に学園長は笑う。

「いいじゃないか、この話が少しでも漏れれば、かなりモチベーションがあがるね。」
「ええっと、すでにF組には漏れてますよ？」

そういいながら僕は髪の毛の端っこにくっつけられたワイヤレスマイクを指さす。

「まったく、あんたのクラスは常識ってものを知らないねぇ。」

そんなこんなで話を終えて、校内見学をしたいと言い出したマリヤと共にFクラスにやってきた。

「「「みやのこうじー！でかしたーーーー！！！」」」

ＦＦＦ団のみなさんが、血の涙を流して狂喜している。

「いやはや、聖應の文化祭のチケットなんて、プレミアチケットぶら下げられたら、どんなバカだって鼻息を荒くするわな。」

拳を繰り出すユウジ、平手で受け止める僕。

「土屋君（ムッツリーニ）は既に虫の息ですね」

自らの鼻血の海に沈む土屋君（ムッツリーニ）は置いておいて、ボクはマリヤを紹介した。

「こちら、幼なじみの御門マリヤ。」

「聖應女学院　高等部二年御門マリヤです。よろしく！！」

笑顔のマリヤを復活した土屋君（ムッツリーニ）が連写しまくってる。

島田さんや姫路さんと仲良く話しているのをみて、女の子同士って良いなーとかおもったりする。

ふと気づけば、周辺男子も同じような顔をしているっぽいので、ボクも平均的男子なんだなぁ、とかおもうことにした。

「聖應女学院のプレミアチケットが賞品になった」という話は瞬く間に広まってゆき、男子はもちろん女子も大いに奮起することになった。

今年の文化祭、文月祭は大いに盛り上がることだろう。

第八話（後書き）

原作キャラ、御門マリヤ登場。

これだけのスポットではなく、貴子さんと一緒に文月祭にやってきます。

原作とは違い、貴子さんとは結構仲良くしています。

逆に紫苑さんは原作どおりに入院しているので、登場できませんが、あるフラグが立つと急接近する予定です。

おたのしみに。

第九話

バカとテストと乙女なボク

第九話

「野郎ども、燃えているかぁ！！！」
「「「「うおをををををを！！」」」」
気勢を上げるF組諸兄、熱血紳士の方々。
「俺たちは勝つ！そしてあの永遠なる理想郷（アバロン）を、理想郷（アバロン）へ至る鍵（チケット）を手に入れてみせる！！」
「「「「うおををををを！！」」」」

これがF組全体の話ならまだしも、全校規模で燃え上がっているのが恐ろしい。
彼らが目指しているのは「聖應女学院」の学院祭プレミアムチケットだった。
マリヤから大量に仕入れたので、学園祭の各部門トップ賞品にしたところ、燃える燃える、みんな燃え上がってしまった。
うちのクラスも例外じゃなく、ボク個人がマリヤや貴子さんと面識があるので、その伝でお友達になりたいという邪な目的もあるらしい。
まぁ、ドコがどのようにチケットをとっても、お目付け役としてボクの参加は決まっているし、貴子さんから個人枠で貰ったチケットもあるので、何人かつれていこうと思ってるけど、その辺は秘密にしている。

なにしろモチベーションが下がるからね。

「瑞穂、俺たちは勝つぞ！！」
「うん、がんばりましょう！！」
「協力してくれるな！？」
「力を惜しみませんよ！！」

良いモチベーションだ。
そう思っていたら、ユウジが黒い笑顔になった。
なんか、やばい、そう思った瞬間には手遅れでした。

ユウジが虚空で指を鳴らすと、教室の扉が開いた。
そこから現れたのは、なんと御門マリヤ。
なぜか真っ白なドレスみたいなもの、聖應女学院の夏服を片手にもって。

「そんなわけで、中華喫茶「ヨーロピアン」は、以降、聖應女学院監修「お姉さま喫茶」に変更だ！！
「「「「うおををををを！！」」」」」

な、な、な・・・・！！！！

「男に二言はないよね、瑞穂ちゃん。」
「・・・・一生恨んでやる」
「でもねー、予行演習はしといた方がいいと思うよ？」

そんなわけで、別室でマリヤに剥かれました。

艶やかなる髪の毛。
流れるような姿勢で歩くお身足。
きらびやかな光が追従するような、そんな姿を見て、彼女たちはひざまづいた。
武力統制、正面制圧を旨とする「ロイヤルガーダー」が一斉にひざまづいたのをみて、他の生徒も習って膝まづく。
あたかもそれは夢の光景のようだったと、ある生徒は語っていた。

かの「暗黒お姉さま」「腹黒姫王子」と呼ばれた二年の宮野小路瑞穂が、人々が望む姿で帰ってきたのだった。
しずしずと歩むその姿は淑女のそれであり、柔らかな笑みを浮かべたその表情は深窓の令嬢のそれだった。
ゆったりと解れ髪を弾く姿ですら絵になり、ため息が木霊のように響く。
その姿をあざ笑ったわけではないのだろうが、優雅にほほえまれた生徒は赤くなり卒倒する。

「さすがね、瑞穂ちゃん。このまま聖(うち)應に来てもエルダー張れるわよ？」
「・・・マリヤさん。それ以上言うと武っ血ＫＩＬＬりますわよ？」
「・・・あはははは、結構手強くなったわねぇ。」
「まぁ、周りが周りですから。」

聖應の制服を着た二人の美少女がささやき合う姿は幻想的で、それを再び生でみるためには、と全校の志気が上がった。

はい、ボク登場。
所作を気にしながらＦ組の扉を開くと、みんな無言だった。
うっはー、やっぱり似合わないんじゃん。

うちには最強の男の娘、木下秀吉がいるんだから、ボクがいくら制服着ても・・・・。

「「「「うおををををを！！」」」」

「み、瑞穂、瑞穂なんでしょ？　うっわーすごいばけたわねぇ、男っ気一切なし、その上なんなのよ、この胸は！！・・・・今度貸しなさいよ」

ちょっと怖い島田さん。

「ふ、ふわぁ・・・・す、す、すごいです！！　胸が大きくてそんなにスレンダーで・・・卑怯です、嘘です、許せません～～～～」

なんだか「レベル5」な目の色の姫路さん。

「・・・うわぁ・・・すごいのぉ・・・わしもこんな覇気を舞台で出したいのぉ。」

覇気って何ですか、覇気って、秀吉。

「・・・・ふん、ふんふんふんふ・・・・・ぶはぁ！！」

すごい勢いで連写していた後で鼻血を噴出する土屋君（ムッツリーニ）。

「まぁ、その、似合ってるんじゃないか？／／」

ユウジ、問答無用で霧島さんに通報です。

「・・・ま、まて、やめてくれ・・・、ぐあぁ！」

霧島さんにはその場で処刑して貰うとして、ほかにも気色悪い反応多数でした。

「へぇ、さすが瑞穂。似合ってるねぇ～」

と、わりとふつうの反応の明久に安心していたところで、爆弾が落ちた。

「このまえ楓さんに見せて貰った写真の方がにあってたけどね？」

「え、え、え、なになになに、それって新しい写真？　吉井君、その辺詳しく！」

マリヤの食いつきにシドロモドロの明久が、徐々に真実を開示しようとしたので、手元のシャーペンを投げつけた。

音もなく床に刺さるのをみて、誰もが黙る。

「沈黙こそ、尊い行為だと思いますが、どうですか？」

「「「「「「はい、お姉さま！！！」」」」」」

「あと、ボクのほかにもこの格好をして貰いますから、よろしく。」

「・・・・・え？」

「島田さん、姫路さん、秀吉は決定。明久と土屋君も候補に入れます。」

「「・・・えええええ！？」」

恥ずかしそうに自分の体を抱く島田さんと姫路さん。

秀吉は自分とボクの格好をみて、どうアレンジしようか考えてい

る模様。
そして真っ青な顔の明久と土屋君(ムッツリーニ)。
「ま、まってよ、瑞穂。ボクがそんなカッコウしても・・・・。」
「・・・・俺も無理」
「さてみなさん、ここなる弱気なものに勇気を与えましょう。」
そういいながらボクは二人の前にたつ。
「大丈夫、貴女たちは美しくなれるわ。」
はっとこちらを向く二人。
「一緒に美しくなりましょう?」
思わず頷いたのを見て、ボクは微笑んだ。
いつもの笑みで。
瞬間、自分がなにを了解したのかに気づいた二人だったけど、もう遅い。
「見たか聞いたか皆の衆。かくも覚悟を決めて前進してくれた同士に暖かい拍手を送ってあげようではないですか!」
万雷の拍手の中、ボクはいち早く復活したユウジを一目見て頷く。
ユウジは全て悟っているかのように声を上げた。
「きいたか野郎ども、我らがお姉さまは身を捨てて我らの勝利を願ってくれた。それに俺たちが応えないわけにはいかない! そうだろ!?」

「「「「うおををををを！！」」」」
「我らがお姉さまが勝利が望むなら・・・」
「「「「死しても勝利をつかもうぞ！！」」」」
「我らがお姉さまが死を望むなら・・・・」
「「「「勝利を阻む愚かどもの死を！！」」」」
「野郎ども、総員全力を出せ、結果を出せ、全てはお姉さまのために！！」
「「「「全てはお姉さまのために！！！」」」」

「・・・やば、こっちの方が面白そう。転校してこようかしら」

不穏なマリヤのせりふはおいておいて、ボクは島田さんと姫路さんに追いつめられていた。

「・・・みずほ、ちょっとでいいから、『それ』貸してくれない？」
「・・・宮野小路君、その、体型について相談に乗ってください。」

マリヤ、マリヤ、助けて、助けて～。

第九話（後書き）

再びマリヤ登場です。

こんなに学校を抜け出していいのか、という話もありますが、じつは陸上部の遠征のついでに抜け出てきているのでした。

というわけで、お姉さまになる運命を背負った瑞穂の運命はどっち？

第十話（前書き）

原作をかなり無視して暴走中です。

第十話

バカとテストと乙女なボク

第十話

乙女の秘密会議を経て、ボクと姫路さんがロングタイプの制服で、島田さん、秀吉、土屋君（ムッツリーニ）、明久がミニタイプとなった。

ハフーハフーと鼻息が荒い島田さんと姫路さんはおいといて、クラス以外の男子の視線が多いのも気色悪い。

「ねぇ、瑞穂ぉ、やっぱりこういうカッコウってよくないとおもうんだよぉ。」「・・・（こくこくこくこく）」

「そうですか？　結構かわいいと、評判ですよ？」

「可愛いっていうのは、姫路さんやミナミや秀吉のようなことを言うんだよぉ！！」

それを聞いて二人の女子＋αは更に鼻息を荒くする。

「もう、困っちゃうんだけどぉ～～～～」

「ああ、ミナミちゃん、私も困っちゃいますぅ～」

「うん、ミズキ、わたしもこまってるぅ～」

アホな三人はいいとして・・・・。

「須川君、料理の準備はよろしくて？」

「完璧です、お姉さま（マム）」

「有沢君、室内は完璧かしら？」
「完全無敵です、お姉さま（マム）」
それでは、と胸を張る。
「全てをなぎ払い、無人の野を行くかの如くに勝利をつかみとります。みなさん、準備はよろしくて？」
「「「「「「はい、お姉さま！」」」」」」」」
では、全てをたたき伏せましょう。

共学の学校の文化祭というものは非常に興味深いものでした。
模擬店と称して飲食物を安価で売買したり、書籍や衣装品を販売したりと、まるで小さな町のようだというと、マリヤさんも笑顔で同意してくれた。
さすがに同じことはできないけれど、少し見習っても良いかもしれないとマリヤさんが言う。
確かに、そんな関心と共に目的の教室を目指します。

話を聞いている範囲では、瑞穂さんが所属しているクラスは成績最低者を集めたクラスだとか。
あの瑞穂さんが最低クラスとはどんなレベルの学校か、とおもいきや、クラスを決める試験を私用で休んだために０点になってしまったからだそうだ。
その休んだ理由も、知人の老夫婦のためだというのだから呆れるのを通り過ぎて微笑ましく感じてしまう。
「まぁ、瑞穂ちゃんはお人好しだから。」

「お人好しだけでは済まない気がしますわ。」
「そうかも。」

軽い笑いをあげているところで目的のクラスに到着していたのですが、すごい状況が展開されていました。
バス停から続いていた行列が途切れずこの教室に続いていたのです。
はじめは何の行列かと思っていましたが、まるで道案内をするような列だと思ってました。
が、到着してみれば、なんと・・・・。

「お姉さま喫茶」

の行列でした。

「・・・マリヤさん、どうしましょう・・・。」
「・・・あはははは、いや、こりゃ、参ったわね。」

ここまで人気があるとは、と苦笑いのマリヤさんの向こうに、見慣れた制服の人が立っていました。
そう、我が母校、聖應女学院の制服に身を包んだ女性が。

「いらっしゃいませ、貴子様、マリヤ様。」

にっこり微笑む美しいその女性は、なぜか私とマリヤさんの事を知っているようでした。
でも、私も彼女のことを知っているようで・・・・・。
・・・・はっ、もしかして!!

「瑞穂、さん?」

「ええ、ちょっと仮装しているので判りにくかったでしょうか？」
はにかみながら微笑むその姿も淑女。
こ、これは、いけますね、いけますわね！！
「ま、マリヤさん。これなら来期のエルダー、いけますわ。」
「・・・貴子、一応いっとくけど、瑞穂ちゃんってば男だよ？」
「・・・はっ！・・・ふ・・・不覚でしたわ。」
思わず瑞穂さんが男である事実を忘れていましたわ。
「マリヤさまと貴子さまは、ご招待している方ですから、別口からご案内しますね。」
そういって、優雅な仕草で教室の反対側から通されました。
扉を開ければそこは、まるで西洋のカッフェテラスのように整えられた内装と丸いテーブルがいくつか設置されている空間でした。
そのテーブルには何人もの男女が座り、いささか所作はおかしいながら優雅にお茶を楽しんでいらっしゃいました。
「みなさま、本日の特別なお客様をご紹介いたします。」
そういって、瑞穂様は私たちから一歩下がりました。
「御門マリヤさま、厳島貴子さま。共に聖應女学院からおいでいただきました。みなさま、よろしくおねがいいたします。」
まるで導かれるように例をする私たちを、この空間の人々は優しく拍手で迎えてくれた。
なんという優しげな拍手なんだろうと思いつつ、一番前の席に通

された。

「さ、お茶をお持ちしましょう。」

瑞穂さんが片手をあげると、どこからかショートボブの少女が現れる。

ショートの聖應制服を着た彼女は、緩やかな所作でお茶を入れてくれた。

「・・・お待たせしました、おねえさま」

か細いハスキーな声で言う彼女は、一礼をそして別のテーブルへ向かった。

私たちは彼女の入れた紅茶を楽しむ。

「それにしても、ずいぶんとことんまで演技させてるわね、瑞穂ちゃん。」

「そりゃそうだよ。この部屋には行る前に「お姉さま規約」を宣誓してもらってるし。」

いつもの口振りに戻ってはいるものの、にこやかな笑みの瑞穂さん。

「・・・そのぉ、「お姉さま規約」って何ですの？」

「貴子さん、話す内容は意識しなくても、怪訝そうな表情は勘弁してください。にこやか微笑んでいるだけで、周囲が和みます」

つまりそういう所作を徹底させているそうです。

それを守れなくれば入店お断り。

守りきれなくても退場という厳しいルール。

「ルールは厳しいほどゲームは楽しいんですよ？」
なるほど、と感心してしまいました。
「ところで、瑞穂ちゃん。ほかの子が少ない気がするんだけど？」
「ああ、それは・・・」
私たちが通された入り口から五人が入ってきました。
一人は従者（サーバント）の格好をした男性でしたが、残りは聖應（うち）の制服を着た女子でした。
「お姉さま、予選は全員通りました。」
「ご苦労様。・・・お疲れの所申し訳ないけど、店内をお任せできますか？」
「「「「「はい、おねえさま」」」」」
まるで一流の従者やメイドかのような、所作で全員が周囲に散ります。
これが学校行事の一部なのかと疑わんばかりの練度に驚きを隠せません。
「ところで『お姉さま喫茶』なのに、瑞穂ちゃんはなにもしないの？」
「ボクがここにいて、みんなにこの格好で愛想を振りまいていることが、ここの売りなの。」
「・・・あ、なーるほど」
私も納得してしまいました。

「それでは、瑞穂さんがお楽しみなれないんじゃないですか？」
「そうでもないんですよ？　みんながこっちに会いに来てくれますし、裏方も楽しそうですしね」

そういいながら、この部屋には似つかわしくない木の締め窓を向こう側に開きました。

「みなさん、お嬢様方は貴女たちの働きに期待してらっしゃいますわ。死力を尽くしなさい。」
「「「「「はい、おねえさま」」」」」

野太いながら朗らかな声が響いたとたん、この空間に拍手が満ちました。

「・・・と、まぁ、こんな遊びも取り入れているわけです。」
「・・・感心を通り越して空恐ろしい話ですね。」
「まぁ、全ては貴子さんが持ち込んでくれたチケット争奪のためでして、お恥ずかしい話です」
「何でしたら、もう少し融通しましょうか？」
「いえいえ、それには及びません。ですが、来年以降もご提供いただけると有り難いですね。うちの生徒たちにも良い影響があるでしょうから。」

今年の入場者を審査した上でいいので、仮にでもＯＫして欲しいとおっしゃったので、私の影響が残る範囲でなら、とお約束しました。

「・・・お姉さま、お客様です」

不意に現れたショートボブの女子が囁きました。

「・・・判りました。少々お時間を。」

そういって席を外しつつ、美しい所作で別口をお出になると、廊下から歓声や矯声が響きました。

しばらく響いていた声も、一瞬にして静まり、一人の女性を伴って瑞穂さんが現れました。

「みなさま、お楽しみの所申し訳ありません。再び新しいお客様をご紹介します。みなさまもご存じ、藤堂カオル学園長先生です。」

「よ、この雰囲気に合わない口調でおじゃまするよ。」

ずいぶんとアケスケな口調でしたが、その所作は美しいものでした。

「では、先生、私たちと席を同じくしていただけますか？」

「いいのかい？　乙女の園に造花が入っても。」

「先生、自らをおとしめる発言は当空間で禁則となってます」

「・・・そうかい、悪かったね。」

そういいつつ、新しい席を用意した少女に小さく挨拶し、四人で席を囲みました。

「で、お嬢ちゃん方。順調に宮野小路に誑かされてるかい？」

ぶっ、思わず噎っせてしまいました・・・。げほげほ。

「はい、先生。順調にたらし込まれとります。貴子さんなんか、条件付きながら来年のチケットも約束させられてますし。」

マ、ママママママ、マリヤさん！？

「ほほー、やるもんだねぇ。よくやった宮野小路。いろいろ褒美を考えてやろう。」

「先生、これはわたくしと貴子さんの友誼の話。学校に貢献するのが目的ではありませんよ？」

「それでもな、少子高齢化の昨今で、新入生集めの看板は一つでも欲しいのさ。」

ケラケラと笑う先生でしたが、一瞬瞳を輝かせます。

「で、宮野小路。内密な話をしたい。どこかないかい？」

まるで悪代官のような様子に、瑞穂さんは応えます。

「一応、聖應のお嬢様方がいますけど、一緒に聞いた方がいい話ですか？」

「そうだね、あとおまえの所の代表を連れてきな。」

そうですか、と呟いた瑞穂さんは、再び指を鳴らします。

「お呼びでしょうか、お姉さま」

現れたのは先ほどの男性。

「人払い、それも盗聴のない空間をお願い。」

「判りましたお姉さま。」

そう言いながら男性は小型無線機を片手に何処かとはなしています。

「最善はこの空間。しきりを入れてお色直しという形が最善かと。加えまして、時間上限は三十分になります。」
「先生、いかがですか？」
「いいだろう、おまえ等を信じるよ」

屏風しきりに加えてなにやらの電子機器が設置されているのを見て首をひねると、ショートボブの少女が囁くように説明してくれました。

「・・・消音技術を使った盗聴防止と、妨害電波による盗聴防止。」

なんでしょう、異常なまでにプロっぽいんですが・・・。
なんだかこんなスゴい人たちを私たちの学院際に呼んでもいいのかどうか、本気で悩ましく感じています。

「どうしました、貴子さん？」

・・・エルダー、エルダーや。
この人こそ来期のエルダーや・・・。

第十話（後書き）

えーっと、貴子さん視点の話でした。

もちろん貴子さんも崩壊してます。

ある意味クロスじゃなくて原作崩壊ですね。ええw

ここで女装組が全員「少女」と称されているのは、完全に勘違いさせるほど上手くいっているのではなく、貴子さん視点で自分の学校の制服を女子以外が着ているわけがないという固定概念によるものです。

次回は瑞穂視点に戻りますので、化けの皮がはがれますw

第十一話

バカとテストと乙女なボク

第十一話

作戦会議をすることになった。
でも、時間がないので衣装はそのままだ。
「って、僕は着替えさせてよー！」
明久（バカ）の意見は却下だ。
「で、学園長（ババァ）の話の裏はとれてるのか？」
執事服姿のユウジの隣には、ドロドロに溶けきったメイド姿の霧島さんが引っ付いてる。
もう、拒絶する元気もないらしい。
「・・・三年A組の常村と夏川が教頭と組んでる。」
土屋君（ムッツリーニ）の報告にみんなが唸る。
「・・・卑怯ですね、許せません。」
「推薦でもチラツかされてるんでしょ？」
ムッツリーニの引っ張りだした写真を見て、思わず思い出す。

「あ、このバカ、あのときの二人だ。」

貴子さんに絡んでいた二人であることを思いだした。

「じゃぁ、この二人が優勝したら・・・・」

「来年はチケット完全に無しだな。」

「「「「「なんだとぉーーーー！！！！！」」」」」

燃え盛るＦＦＦ団御一行様。

「「「話は聞かせていただきましたわ！！」」」

突然現れる武装少女達。

悪名高きロイヤルガード。

「今すぐ誅殺のご命令を、おねえさま！！」

「「「おねえさま！！」」」

内心ばったり倒れそうになったけど、ぐっと踏ん張って姿勢を正す。

「貴女達は先日の件で既に手を汚しています。これ以上手を汚すことは許しません」

「「「「「お姉さま・・・・・。」」」」」

しかし、このままでいい訳がない。

そこで僕は天誅ならぬ人誅を仕掛けることを提案する。

「おいおい、そりゃ、ちょっとこえーな。」

「瑞穂は怖いのぉ。」

「・・・・流石腹黒姫王子」

ユウジ・秀吉・土屋君(ムッツリーニ)は直ぐに判ったらしいけど他のF組勢やロイヤルな少女達も思いつかなかったらしい。

「つまりですね、貴子さんを襲ったのがこの二人だと触れまわって、二人にチケットがわたれば、来年のチケットどころか今年のチケットも危ないと警告するだけです。」

「「「「「「くっろーーーーーー!!!」」」」」」

はっはっは～誉めてくれなくても良いんだよ？

「でもさ、瑞穂。そんな情報をどうやって広めるの？」

明久君、今回この会場で一切禁止されていた行為は何だったかね？

「えっと、おさわり・セクハラ・あとは・・・撮影」

「お、明久。よくお前が全部覚えていたな」

ユウジは感心したけど、僕も感心しました。

「自分の貞操と未来の評判のためだよ！　こんな格好の写真が残ってたら、本物だって思われちゃうよ！！」

恥ずかしそうにイヤイヤする姿を見て、島田さんと姫路さんも身悶えていた。

「ミナミちゃん、ミナミちゃん。私そろそろ限界ですぅ。」

「・・・ミズキ、もう少し耐えるのよ。ウチもそろそろ限界ぃ・・・

・。」

なにが限界なのかはおいておいて、僕は懐から数枚の写真を取り出す。

偽胸の間からだしただけなのに、凄いどよめきが。

「さて、島田さん、姫路さん。これ、一枚いくらで買います？」

ぴっと二枚ほどきって二人に届くように投げる。

島田さんは格好よく人差し指と中指で受けたけど、姫路さんは両手で挟むように受けました。

二人は怪訝そうな顔でその写真を見た後、両目を見開いて、お互いの写真を見合って、携帯で撮影しあっています。

うんうん、予想通りですね。

「で、別種類５枚セット。いーくら？」

「・・・１０００円、いいえ、５千円までだせますぅ！！」

「・・・うちだって五千円は最低でも出す、月賦ならもっと！！」

囂々と買う気を燃え上がらせて財布を探る二人を押しとどめる。

「これはですね、既に行列にきて入店できなかった人にランダムで配られた写真です。」

な、なんだと、と表情を堅くする島田さんと姫路さん。

大丈夫ですよ、店員には無料で配りますから。

「ほ、ほんとでしょうね！？」「お金なら出しますよ、本当ですよ！！」

「ねーねー、瑞穂、その写真って何なの？」

にこやかに平和そうな明久をみると、なぜか虐めたくなります。もちろん恋ではありませんが。

「これです。」

見せたのは、店内で甲斐甲斐しく働く「アキちゃん」写真セットと店内店員セット、あとはお姉さまセット等々。

「ぐ、ぐあーーーー！！！　撮影禁止、撮影禁止でしょぉ！？」
「お客様の無断撮影禁止、ってだけですよ？」
「回収して回収してぇ～～～！僕が本物だと思われちゃう～～～～～～」
「安心しろ明久。メインはお姉さまセットだ。」
「じゃ、少量なんだよね、少量なんだよね？」
「アキちゃんセットは行列客からの要望が一番でな、すでに第一次ロットははけた。いまは第六次ロットだ。」
「なんでなんで、なんでそういうことをするんだよぉ！！！」

「「面白いから？」」

僕とユウジの同時攻撃に泣きぬれた明久は、よよと崩れて秀吉にすがる。

「秀吉ぃぃぃ、みんながいじめるよぉぉぉ」
「こらこら、いくら明久が似合っているからと言って、そう責め立てるでない。ちゃんと説明すれば明久とて頷くと思うんじゃが？」
「頷かないよ、女装写真だよぉ！？　恥ずかしすぎるよぉ！」

しょうがない、気合いを入れるか。

「実は、今回の写真は配っているだけだけど、販売写真には被写体に一枚当たりのバックマージがはいるんですよ。」

ぴたりと泣き止む明久。

むー、ユウジの言ったとおりだ。

「・・・・いくら？」

「一枚当たり１０円。今のところ２０枚裁いてるから２００円」

ごしごしと顔を吹いた明久は、僕に向かって右手を差し出す。

「がんばろう瑞穂。」

「うん、がんばってね、アキちゃん。」

「・・・くじけそう」

で、話が大幅にずれたけど、ことの真相をこの写真の包装紙に書くって寸法。

どのセットでも「聖應」に思い入れがあるから、この空間にきたがるんでしょう。

で、あわよくば本物の「聖應」にいきたい人たちにとっては、あのミイラコンビは邪魔以外の何者でもない。

つまり、３－Ａおよび常村・夏川コンビは学校的な敵と照準されるわけですね。

「いじめより酷いな。明確な理由もあるし、原因は自分達にあるし。」

苦笑いのユウジだったが、秀吉は顔をゆがめていた。
「じゃがな、店外でいろいろとウチへの嫌がらせはしているみたいじゃぞ。」
聞けばあらゆるところで「２－Ｆの女装がキモい」とか「２－Ｆには品性を感じられない」とか「気が違っているような企画だ」等々喚いて歩いているとか。
「・・・それならウチにもきた」
霧島さん曰く、何度も何度も入店を繰り返して色々と悪口を言っていたそうだ。
しかし、２－Ｆに入店したことのある生徒やお客さんに反論されたところで逆ギレして叫んだそうだ。
「宮野小路や木下ならまだしも、あの吉井はキモいだろうが！？」
瞬間、一人の生徒が動いた。
拳、拳、拳、拳、投げ、投げ、蹴り蹴り蹴り。
流れるような動作で二人を叩きのめしたのは久保利光。
その顔は鬼が如くになっていたという。
彼の絶叫におそれをなした二人はその場を逃走し、二度と入店しなかったという。
「・・・で、これが叫んだ台詞」
『・・・キモいだとぉ！　貴様等になにがわかるぅ！！　あの体、四肢のバランスに加えてあの顔かたちと髪型！　男子の一線を犯し

ていないながらあの動作あの仕草、恥じらいつつも現状になれてしまっていて、楽しくなってきてしまっている自分を恥ずかしがっているあの恥じらいの表情、かわいいではないか、萌えるではないかぁ！！　お姉さまを完成された美とするならば、アキちゃんはこれから花開く、まさに蕾の愛らしさ、それが判らぬとは、貴様ら生かしてはおけん！！』

「・・・いやーーーー！　もうやめるぅ、もうやめるぅ～～～」
「・・・流石にちょっと可哀想になってきませんか？　宮野小路君」
「いいえ、全く。」

泣きわめく明久にユウジが何事かささやく。
まぁ、たぶん、正式なキックバックの金額を聞いたんだろう。
再びごしごしと顔を吹いた明久は、僕に向かって右手を差し出す。

「がんばろう瑞穂。」
「うん、がんばってね、アキちゃん。」
「・・・くじけさせたいの？」

第十一話（後書き）

第十一話です。

事の他、原作キャラが空気になってしまっているので、そろそろ梃入れします。

ご希望のキャラはあるでしょうか？

第十二話

バカとテストと乙女なボク

第十二話

ちょっと不味いぐらいに上手くいっている。

写真包装による真相って奴が、凄い勢いで全校生徒と来場者に広まって、３－Ａ及び常夏コンビ（明久命名）への無言のバッシングが凄いことになった。

召還大会へ出場した二人へは無茶苦茶なブーイングがあったし、３－Ａへは誰も来場者がいなくなった。

代わりにと言っては何だけど、お姉さま喫茶に来場できなかった人たちやこれから来場を見込めない人たちの間で土屋商会（ムッツリーニ）販売のセット写真がバカ売れになり、裏方ＦＦＦ団の大半を写真制作に回さざるえなくなったぐらいだった。

昼中をすぎた当たりで放送室から、今回の常夏コンビの行動にクラスは関わっていない旨の宣誓があり、結果、常夏コンビをクラスが切った事を意味した。

「・・・なんて浅慮な。」

僕のつぶやきに、正面でお茶を飲んでいたメイド姿の霧島さんが首を傾げる。
ユウジが召還大会とこの空間にかかりっきりなので、こちらに遊びに来たのだという。

「浅慮・・・・なぜ？」

ユウジなら一発で判るんですけどねぇ、と苦笑いしながら霧島さんをみる。

「学校の中で自分の位置を確保するためには、いくつかの地域コミュニティーを形成する必要があります。」

そう、それは、友人グループ・委員会活動・クラブ活動・・・・・そしてクラス。
友人としてはあの二人の括り、委員会活動やクラブ活動もない。
最後の砦のクラスからも切り捨てられた。
縋れる繋がりは既に教頭しかない状態だった。
既に追いつめられた二人はなりふり構って入られないだろう。
それが更に自分たちを追いつめる結果となったとしても。

「・・・・それって、自業自得、でしょ？」
「まぁそうなんですが、実際は僕たちが騒ぎたってなければ起きなかったことなので、凄く逆恨みされてますよ、たぶん」

僕の言に霧島さんは、ちょこっと顔をゆがめる。

「・・・手段を選ばない時点で、犯罪者以下ね」

でも、追いつめすぎたかなぁ・・・と反省をしていないわけじゃない。
とはいえ・・・
「霧島さん、そろそろ試合では？」
「・・・そうね。」
霧島さんを木下優子さんは、準決勝で明久＋ユウジにあたる。
すでに明久とユウジは会場に向かっていた。
「どっちが勝っても如月ハイランドチケットは必ず。」
「・・・感謝してるわ、宮野小路」
ぐっと握手の僕たち。
まぁ、これは勝利への布石ですよ、布石。

準決勝を下した明久たちは、決勝で常夏コンビと戦うこととなった。
罵声とブーイングの渦の中、常夏コンビは黒い笑い顔を浮かべている。
事がここにきわまり、すでに反論や言い訳をしつくしたのだろう。
それでも周囲から孤立し、そして叩かれ続けたせいで、鬱積した感情が怒りに転嫁されているようだった。
彼らが打った最後の妨害、２Ｆの女子誘拐も、この会場に移動中

に仕掛けてきたようだが、ロイヤルガードに撃退され、生徒会執行部に引き渡されている。
すでに万策が尽き、最後の手段は自分たちで勝利を掴む他無い状態だった。
いや、最後の最後で自分たちが勝利を得られれば、他の何をもおして最後の目的だけは達成できる、そんな状況なら笑うのも判ると言うものだ。
そんな中ならば罵声とて無視できようと言うもの。
彼らには薄笑いするだけの根拠と自信があったから。
圧倒的点数を誇るであろうAクラスが、もっとも最低成績であろうFクラスに負けるはずがない、と。
しかし彼らは忘れていたのだろう。
我ら2Fが、今年度はじめに起こした試験召還戦争の変遷を。勝利の要因と敗者の原因を。

客席は歓声にあふれた。
予想や諦観を乗り越えて、明久とユウジは常夏コンビを圧勝した。
表彰台で笑顔で手を振る明久を、誰もが撮影しまくった。
明久、聖應の制服を着たままなのを忘れてるよね、うん。
優勝の賞状と副賞を色々と受け渡した後で、学園長がマイクをとった。
「あー、今回は色々とあって特別商品があったわけだが・・・」
そういいながらこちらに視線を送る藤堂カオル先生。
なるほど、ここで発表せよ、と。
了解了解と、にこやかにほほえんで僕は立ち上がる。

どこで打ち合わせしたのか、スポットライトが僕に集まった。
気づけば僕の隣にマイクを構えた土屋君（ムッツリーニ）。
受け取りつつ周囲を見回してほほえむ。

「「「「「「「おぉぉぉぉぉぉ・・・・。」」」」」」」

どよめきが収まったところで、僕はマイクのスイッチを入れた。

「・・・先日、私の友人である聖應のお嬢様方からチケットを受け取った際に、あるお伺いをしました。」

しん、と静まる会場。

「来年もいただけませんか？　とお聞きしたところ、今年の招待生徒に問題がなければ、というお約束をいただきました」

「「「「「おおおおおおおおおおおお！！！！！！！」」」」」

爆音ともいえる歓声が周囲に満ちあふれる。

「・・・というわけで、今回聖應にいく方々は、くれぐれも所作には気をつけてくださいね？」

いままでの賞賛の視線は、凄い厳しい監視の視線へと変わった。
まぁこれで静かな日々と言うよりも、細かな監視が明久たちにつくので、身の安全が図れるはずだ、たぶん。

クラスの最優秀出展は２－Ａがダントツだった。
得票数は２－Ｆも負けてなかったんだけど、「出展店舗を来店し

た上での投票」が条件だったため、行列に並んだだけの人は得票として生かされなかった。
更に、並んだ人相手に行われた土屋商会（ムッツリーニ）の暗躍が減点対象になったらしく、総合成績で三位になってしまった。
もちろん、すでに召還大会で優勝している２－Ｆへのテクニカルジャッジなんだろうけど。
一応、２－Ｆの仲間には個人入手したチケットを配っているので、秋には仲良くみんなで聖應に遊びに行けると言うものだ。

～裏～

男たちは憤っていた。
単にナンパしていただけなのに、そのことを高らかにあげつらいコケにしたどころか、長々と嫌みったらしく言い続け、最後には全校生徒を味方に付けて、ここぞとばかりに責め立てて。
何ら非のない自分たちを、よくぞここまで責め立てられたと逆に感心させられる。
しかし、この怒りは、この怒りだけは決着をつける。

「そうだよな、夏川」「おう、常村」

この怒りを、あいつに、宮野小路瑞穂に・・・！

・・・・びしっ！！

二人の真横の壁が、なぜかひび割れる。
日々の中心にはなぜか穴。

・・・・・ターーーーーン・・・・・

まるでタイヤがおもいっきり破裂したような音が遠くから響く。
二人の男は一瞬にして全身汗まみれになった。
行くも引くもできない状況が永遠に続くかと思ったが、急遽目の前に身長２ｍほどの男が現れた。

「アナタタチ、ミズホ、イジメル？」

男たちには分かった。
返事次第では、壁の穴が自分たちにあくことを。

「アナタタチ、ミズホ、イジメル？」

答えは決まっていた。
全力で首を横に振る男たちをみて、２ｍの男はうんうんとうなずいた。

「・・・カンガエ、カワッタラ、マタカクニンシマス」

これからは清貧に行きよう、二人は誓い合ったのだった。

第十二話（後書き）

お待たせしました、第十二話です。

これで学園祭は一区切りです。

一部修正しましたー（７／１６）

第十三話

バカとテストと乙女なボク

第十三話

文化祭を終え、学校全体を包んでいた一体感が余韻としての凝っている、そんな時期だった。
毎朝の変態告白とその掃討をすませて、僕は途中でいつもいっしょになる秀吉と下駄箱に。
実際、告白が他の学校の生徒まで広がったのはウザイ。
全地域レベルで告白されている秀吉の気持ちがよく解る。

「・・・なんじゃ、瑞穂。よからぬことを考えておらんか？」
「まっさかー。」

当然考えています。（きっぱり）

「あら、宮野小路じゃない。おはよ。」
「あ、木下さん、おはようございます」

目の前には廊下を歩く木下優子さん。
最近、また、秀吉と間違われて告白が増えているという不憫な・・・・

「宮野小路、いま、ずんごく失礼なこと考えてたでしょ」

「まっさかー。」

当然考えていました。（きっぱり）

「・・・まったく、性格以外はまともなんだから、あんまりF組に染まるんじゃないわよ？」

と言われても、あの濃い空間で真っ白でいられるんは不可能ですよ？

「まっしろ・・・・」

「真っ白はないじゃろ・・・・」

「・・・白いですよ？」

とまぁ、こんなバカな会話をしつつ、Fクラスまでくる。

「ほら、代表！　そろそろ行くわよ！」

「・・・優子、もうすこしだけ・・・」

精根尽き果てたユウジに寄り添う霧島さんを引き剥がす霧島さん。

こんな毎日が当たり前になってしまったのが面白すぎる。

ずるずると引きづられてゆく霧島さんに僕はささやく。

「・・・約束の品は来週郵送で到着。」

「・・・宮野小路、感謝」

さーて、来週末に向けて計画開始かなー。

昼休みにユウジと明久から相談を受けた。
なんでも、明久とユウジが夜中の学園に忍び込んで、勝手にシャワーを使っていたとか。
それを西村先生に見つかってしまい、今週末プール清掃をしなければならなくなってしまったそうだ。
手がほしいので手伝ってほしいという。
二つ返事で了承すると、そのままユウジは土屋君を勧誘。

「・・・アキちゃんの写真を整理するのに忙しいからだめ」
「ムッツリーニ、ちょっと待って、何の写真だって？」
「・・・・・（無視）」
「島田や姫路も誘うぞ」
「清掃道具を準備しとけ！！」

すがすがしいまでのムッツリ。でも清掃はイヤだけど覗きたいと言わないところが男らしい。

「わしも行ってもいいかの？　掃除は手伝うぞ？」
「もちろんだよ、秀吉！」

飛び上がらんばかりに喜ぶのはどうかと思うよ、明久。

とはいえ、これでずいぶんと人でも増えたし、どうにかなるかな、とか考えているところで、我がクラスの花二人登場。

「ねーねー、何の話？」
「楽しそうですねー。」

「ああ、今度学校のプールを俺たちで貸し切りに出来るんだ。一緒

にどうだ？」
「「！？」」

瞬間的に一歩離れる二人。

「あ、あの、で、でも、準備が・・・」
「・・・そ、そうですよね、準備が大切ですし・・・。」
「ちなみに、瑞穂と秀吉は新しい水着を明久に見せに来るぞ」

「「ず、ずるい！！！！」」

「いくら括れに自信があるからって卑怯です！！」
「そうよ、いくら何でも卑怯じゃない！！」

何言ってるんでしょう？

「ウチだって、水着新調していくわよ！」
「わ、私だって！！」

仲良しグループ全員参加ですね～。

「あとは、翔子に電話すりゃおしまいだな」
「ユウジ、大人になったね。」
「明久・・・こんな状況で翔子に電話しなかったら、後で知られて俺がどうなるか想像できるだろ？」

知られるのは前提なんだ。

「・・・そうだね、樹海・・・いや、ミンチで海？」
「死体処理まで飛躍せんでいい」

そんなこんなで、今週末は学校のプールにＧＯ、となった。

プールにはいるのは日曜と行うことで、土曜のウチに掃除しちゃおうと言うことで、僕たちはプールに着たんだけど、見渡す限りの人の海になっていた。

なんでか清掃を手伝ってくれるそうだ。

手伝う理由は様々で・・・・

ＦＦＦ「土屋商会（ムッツリーニ）からの写真供給があると聞いて。」
ロイヤル「土屋商会（ムッツリーニ）からの写真供給があると聞いて。」
久保君「土屋商会（ムッツリーニ）からの写真供給があると聞いて。」
清水さん「土屋商会（ムッツリーニ）からの写真供給があると聞いて。」

って、みんな同じですよ！！

どれだけ人気なんですか、土屋商会（ムッツリーニ）！！

「まぁいい。ほんじゃいっきにやるか！？」

「「「「「おお！」」」」」

これだけの人数で一気にやると、すごく早く終わった。

夕方のプールで僕たちはプール清掃達成記念と言うことで記念写真を撮ってから別れた。

「あ、そうだ。」

思い至ったのは偶然。
でも電話までしようと思ったのはいたずら心だった。
まさかそれが自分の首を絞めるとは思わなかった。

「あれ、瑞穂ちゃん、ひさしぶり、なに？」
「うん、あのね、今度うちの学校のプールを貸し切れるんだ。くるのはウチの仲間だけなんで、マリヤも来ない？」
「・・・いいねー、いいわ、すんごくいいタイミング！」
「何か用でもあった？」
「いやいやいや、いくいくいく。絶対にいく。貴子ともうひとり連れて絶対に行くってば」
「あ、お友達？いいよ、こっちは連絡しとくから」
「よっしゃーーー！！！　じゃ、たのしみにしてるからねー！」

こんな軽い会話があったあとの結果、あんな運命が待っていると
は・・・。

その運命と見えるには数ヶ月の時間が必要だった。

第十三話（後書き）

連投です。続いて１４話をお楽しみください

第十四話

バカとテストと乙女なボク

第十四話

あらかじめ早めにきた僕は、プールにいろいろと持ち込んでおいた。

ピーチパラソルとデッキチェア、クーラーボックスと中身。
楓さんのフォローもあって女子更衣室の清掃も済んだし、水周りの除菌も完璧。
とりあえず、チェアー関係は参加が決まっている女子の数を確保。
男連中は適当に日陰を這いずるがいい。

「瑞穂様、そろそろお出迎えの時間です。」
「ありがとう、楓さん」

僕は集合場所に先に着ているであろう坂本夫妻・・・

「おい、瑞穂。おまえ今、不吉なことを考えなかったか？」
「え？　ふつうに、坂本夫妻って・・・」
「だーーー！！　おまえ等がそういう扱いをするから、翔子のやつが調子に乗って・・・ぐぁぁぁぁ！！」

流れるようなアイアンクローでユウジをリフトアップしながら無表情にピースサインの坂本翔子さん。
嫁がこれだけ夫を操縦してれば、坂本家は安心だね。

「・・・てめー、瑞穂、おぼえてろよぉ・・・・」

あーあーあー、聞こえない聞こえない。

というわけで、鍵を坂本夫人に預け、僕は裏門に急いだ。
しばらく待っていると、長い車体のロールスロイスが登場。
後部座席から現れた三人を僕は校舎まで案内することにした。

着替えてプールまで行くと、地獄絵図だった。
両目を押さえて転げ回るユウジ。
鼻血を流して倒れる明久と土屋君(ムッツリーニ)。
そしてなぜか女物の水着を着ている秀吉。
いやはや、どうなっているのやら。

「あ、宮野小路君・・・うわぁ・・・本当に括れてますぅ!!」
「な、なによ、そのスピードレーサータイプって!! スタイルに自信があるから露出に必要な知ってわけぇ!?」

僕は君たちがなにを言っているのかが解りません。

「はいはい、落ち着いて。今日は特別ゲストも呼んでるんだし。」

合わせたように現れた三人をみて、再び倒れる明久と土屋君(ムッツリーニ)。
ユウジは目隠しをされて端っこに放置された。

「おお、お主たちは・・・・」
「どもー、お呼ばれできた御門マリヤでーす。」

「お久しぶりです、厳島貴子です。」
「・・・初めまして、十条　紫苑です。」
「「「おおおお〜〜〜」」」
「で、こちらの十条　紫苑様は、なんと聖應女学院の今期のエルダーシスターでいらっしゃるそうです。」
そんな紹介に、気配を乱した周囲。
よし、場所は把握！！
足下のクーラーボックスから取り出したサブマシンガン（エアーガン）を両手で構えて左右にばらまく。
「「「あたたたたたた！」」」
「不心得ものども、直ちに撤退しなければ商会すら相手にされないものと知れ！！」
「「「ご、ごめんなさーい！！」」」
蜘蛛の子を散らすようにいなくなった周囲の気配に満足する僕だったけど、正面の聖應三人組は呆気にとられていた。
「あ、済みません。お綺麗な方々がいらっしゃると聞きつけたバカどもが群がってきたもので。」
簡易的につけた水着のストラップにサブマシンガンをひっかけると、三者三様の反応だった。
「瑞穂ちゃん瑞穂ちゃん、それ貸して貸して！」

「瑞穂様、凛々しいですわぁ・・・・」
「・・・まぁまぁ、すてきな感じ、ですねぇ・・・じゅるり・・・」
なんだろう、すごく背筋の怖い反応があった気がする。
「（貴子さん、あなたがおっしゃってた、次期エルダーというのは？）」
「（はい、あの方です。どうですか？）」
「（よろしいのではなくて？　いいえ、よろしいわ）」
「（お姉さま、鼻息が荒すぎます。お体に障りますわ）」
「あら、ありがとう貴子さん。でもね、こんな楽しいことに呼んでいただいて、興奮するなと言うのは酷な話じゃありませんか？」
どうやら深層のお嬢様方には、この手の学校のプール貸し切りという遊びも面白いらしい。
とはいえ、こちらのお嬢様は、サブマシンガンを周囲に向けてバラバラばらまいてる。
なんだかこっちは昔と変わらないな。
「ヒャッハァ～、みてみて瑞穂ちゃん、スケベ男たちがゴミのようよ！？」
イケナイイケナイ、悪人顔のマリヤにみんな引いてる。
「何だろう、御門さんって通じるものを感じるわ。」
明久抹殺力を誇る島田さんは通じるだろうなぁ。
「・・・胸以外は」

おもむろにみんな視線を別方向に向けました。
泣いてませんよ、泣いてませんからね？

女性連中をビーチパラソルに追いやると、明久や土屋君（ムッツリーニ）などから「ナイス瑞穂ＧＪ」の評価をもらいました。
まぁ、見知らぬ女子がいるとはいえ、この選り取り緑な状況は、男子にとって何にも代え難い状況だろうし。
ふと気づくと、プールサイドに引っかけておいた携帯にメールが入ってました。

『聖應三人組のフォトプリーズＢｙ須川』

さすがＦＦＦ団長、情報早いな。
んじゃ、返信。

『かなりの仕事を手伝ってくれるならＯＫ　Ｂｙ瑞穂』

瞬時に帰ってきました。

『何でもする！！　ＦＦＦ団』

そっか、じゃぁ、命を懸けてもらう前渡しですねぇ。

携帯片手に女子パラソルに向かって手を振る。

「みんなー、ポーズ！」

すごくのりがよいみなさんが、思い思いのポーズを取ってくれた。

ぱしゃ！

「「「「「いえーーーい！」」」」」

「瑞穂ちゃーん、後でみんなに送ってねー」

「はーい。」

と、いうことで、今の写真を須川君に送る。

遠く校舎の方で絶叫が聞こえた。

むー、ずいぶん近くにいましたね。

『宮野小路瑞穂。我ら血の盟約に基づき、汝を陰の主としてつき従う所存。我らの命を好きに使い賜え　ＢｙＦＦＦ団』

よーし、来週の手も確保できたぁ。

途中乱入してきた島田さんの妹や、Ａ組の工藤さんなんかも参加して、すごく楽しい一日になった。

そんな一日も、早々に日が暮れ始める。

「んじゃ、片づけは俺らでやっとくから、瑞穂はお嬢さん方を送ってくれ。」

「了解、まぁ、送ったら戻ってきますから。」

気にするなって、とにこやかにほほえむユウジ。

こいつ、いつもこういう顔が出来たら、女にモテモテなんだろうなぁ、とか思ってしまいました。

「・・・宮野小路、いま、不吉なこと考えたでしょ？」
「のーのー、坂本夫人、僕は協力者です」
「・・・そうだった、宮野小路はいい人」

うんうん、やばかった。
考えごとも気をつけなと命に関わるんですよね、文月学園って。
というか、最近坂本夫人や姫路さんは、Ｆクラスに馴染みすぎなきがしますよねぇ。
やっぱり文月学園という学校のせいでしょうか？

三人を裏門まで送ると、なぜか男女を含めた人々が左右に整列していて、蛍に光なんかを歌っている。
ちょっと引きながら、三人ともに小さく手を振りつつ、迎えの車に乗り込んだ。
で、最後に乗ろうとした十条さんにてをにぎられた。

「宮野小路さん。」

はい？

「・・・是非とも我が校の祭りに行らしてくださいね？」
「はい、是非とも」
「・・・ふふふ、お待ちしてますよ・・・ふふふふふ」

十条さんが車で去ったというのに寒気が抜けずに棒立ちの僕でした。

第十四話（後書き）

いかがだったでしょうか？　１３話・１４話です。

プールの話の次は、如月グランドパークですよ！

そんなわけで、次回更新をお楽しみに。

第十五話（前書き）

大変お待たせしましたが、ちょっとリハビリっぽい話です。

前作からのイメージやキャラにブレがないといいのですが・・・

第十五話

バカとテストと乙女なボク

第十五話

楽しかったプールの翌週。
僕らは如月ハイランド園内にいた。
目の前にはＦＦＦ団の強者たちと女子。
先週の写真（シャメ）の引き替えに命を差し出す勇者たちだった。
もちろん、女子にもちゃんと写真を送ってる。
・・・「あきちゃん」店内版を。

ともあれ、本日の目的を説明すると、男子はダレた。
そりゃそうだろう、あの眉目秀麗な坂本夫人を本格的にユウジとくっつけようと言うのだから。
でもねぇ、君たちは命を差し出したよね？
「しかし、さすがにモチベーションがあがらんぞ」
では、あげましょう、的確に。
「聞きなさい諸君。」
ばっと腕を払う。

「・・・たとえ霧島さんがフリーだったとしても我らに振り向くことはないだろう、しかし、ユウジがフリーだと騙される女子がいるはずだ！！！」

「「「「「！！！！！」」」」」

「まだ見ぬ美少女たちに、そんな先暗い人生を歩ませて、諸君はそれでも紳士か、いやさ、戦士か！？」

「「「「「！！！！！」」」」」

「未だ見ぬ美少女たちの人生を守るため、血の涙をのんでユウジと霧島さんをくっつける、それだけで諸君は、諸君等の人生は明るくともる、それを考えた上で答えろ」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

「諸君、この作戦に意義はあるか？」

「「「「「なかろうはずもない！！！」」」」」

さぁ、戦争をしよう、戦争だ、楽しい楽しい戦争だ！！

～明久

時々、瑞穂は壊れる。

今回もはじめのうちは友達思いの友人スタンスだったのに、いまじゃユウジを人生の墓場に追い込む戦士だもの。

もちろん、素直じゃないユウジと霧島さんの距離を詰めるのは僕

も賛成だけど。

・・・あれ、電話だ。

「はい、もしもし・・・・」

『・・・オマエヲコロス』

「え、えええ！？　なになに？なんなのぉ・・・！！」

不気味な台詞とともに切れた非通知電話におびえる僕だった。

～明久ｅｎｄ

全員が各地に散って、準備を整えた頃、秀吉から「ウエディングシフトコール」が入る。

「み、瑞穂、祐二たち、き・・た・・よ」

息切れしてる明久に衣装替えを宣言。

「え？　僕はこの後アトラクション班じゃぁ？」

「須川君が慣れない着ぐるみで酔っちゃって・・・」

「・・そっか、しかたない・・・っていつもマスクかぶってるよね、ね？！」

「ええい！　とっととこの着ぐるみを着てください！！」

水色の狐の着ぐるみにつっこんで、僕は明久を追い出した。

これも女子の要求（オーダー）なのでスルー。

「こちら大本営、雌狐1および2。バカは放たれた。オーバー？」
『雌1、オーバーです！』
『雌2、オーバーよ！』

うんうん、最近は二人とも素直だなっと。（欲望に）

こうして作戦は順調に進んでいたんだけど、僕の気付かないところでトラブルが発生していた。
でもでも、ＦＦＦ団のバックアップやユウジの活躍でめでたしめでたし。
いやー、いいことしたなぁ・・・・・・

ぷるるるるるるる・・・・

おや電話。

「はい、宮野小路です。」
『・・・てめーが黒幕か？』
「やだなー、黒幕だなんて。時代がかって。お里が知れますよ、ユウジ」
『・・・・オボエテロヨ』
「ええ、この日この時のことを、君の結婚式の時に友人挨拶で話せる日まで覚えていますよ？」
『ヒトヲノロワバアナフタツ・・・』

はっはっは～、ルーズドックのこえは気持ちいいですねぇ。
と、負け犬の声が切れた後、再び電話。

『・・・宮野小路、いいひと』
「感謝はいいですよ？　坂本夫人」
『・・・結婚式に呼ぶ。』
「はいはい、喜んで出席して友人代表しますよ。」
『・・・吉井と一緒にテントウムシのサンバ希望』
「いいでしょう、そのへん今度打ち合わせておきましょう。明久もご飯をおごるといえば、ホイホイついてきますし。」
『・・・やっぱり宮野小路はいいひと』

うんうん、人の感謝は心地いいなぁ・・・。
と、そんな心地よさに酔う僕だった。

先日の如月ハイランドの一件以来、ユウジのところにはブライダル関係の情報があふれるようになった。
坂本夫人が持ち込むだけならまだしも、細かな広告から宣伝までユウジの所まで持ち込まれるようになったものだから、もう大変。
教員までこぞってユウジのところまでその資料を見に来る始末だった。
はっきり言おう、すでに方向性は失われている気がする。
というか、みんな頑張りすぎ。
結婚情報誌が二年前までバックナンバー完備って、うちのクラスってなんなんでしょう？

「・・・瑞穂。俺になにをさせたい？」
「うーん、坂本夫人と幸せな家庭を築いてほしいかなぁ？」
「・・・もう、抗議などせんから悪のりを勘弁してくれ」

とうとう出たユウジのギブアップ宣言にクラス総出で万歳三唱。
やったやったとみんなで握手した。
加えて、いつの間にか現れた「坂本夫人」と握手。
「とうとう、陥落です、坂本夫人」
「・・・宮野小路。あなたには言葉に尽くせぬ感謝を」
「って、やっぱりおまえらつるんでやがったのかぁ！！」
黒い怒りに燃えるユウジは、泣きながら僕を追い回すのだった。
追いかけられている中で歌う「テントウ虫のサンバ」はクラス中の合唱となり、坂本夫人お目にうれし涙が浮かんでいた。

と、いうわけで・・・・

「婚前旅行　ＩＮ　宿泊学習～～～～！！」
「ぶしゅーーーーーーーーーー！！」
「瑞穂、やめてぇ！　ムッツリーニのライフはもうゼロなんだよぉぉぉ！！」

本当なら林間学校とか言う流れであろうそれが、宿泊学習というあたりに文月学園の進学校としてのプライドを感じる。
無論、クラス毎の格差待遇が存在して、Ａクラスは「デラックスサロンバス」、Ｂクラスは「大型サロンバス」、Ｃクラスは「普通のバス」、Ｄクラスは「路線バス」、そして我れらＦクラスは「現地集合現地解散」だった。
ああ、ＧクラスことＥクラスは「校内自習」だった。

ツルカメツルカメ。

下手打つと、とことんひどい目に遭うことが約束されている文月学園だった。

ではどう移動しよか、ということで、相談を始めたんだけど、いつの間にか坂本夫人と久保君登場。

「宮野小路、相談」「宮野小路君、相談がある」

「ユウジじゃなくて？」

コクコクうなずく二人の相談に乗ることにした。

ほら、だって、「婚前旅行」だし。

あー目の前で信じられねえことが起きやがった。

嘘でも幻でもねぇ。

信じられねえかも知れねえから、起きたことだけ言うぜ。

待ち合わせ場所に行ってみると、なぜか「宮野小路」と「土屋君（ムッツリーニ）」という名札をつけた翔子と久保がいた。

軽く手を振っていたので、ダッシュで逃げようとしたら回り込まれてアイアンクローを決められて気絶させられて、気づいたら電車の中で島田が昭久にキレていて、姫路が弁当を差し出していた。

なにが起こってるかわからねぇが、命の危機だけはしっかりと理解できた。

もう、今死んでもおかしくない。

つうか、姫路の弁当を食べれば即死、翔子の弁当を食えば人生の墓場。

・・・だめだ、完全に進退窮まった。

すでに秀吉は待避してるし、久保は明久にからんでる。
・・・くそ、逃げ場がねぇ！
いや、一つだけ自爆系の技はある。
しかし、いや、死ぬよりもマシだ。
俺は、姫路の差し出す弁当をとるふりをして胸をつついた。

～明久サイド

ゆうじ、ゆうじ！

「明久、心肺停止じゃ！！」
「諦めないで！！　ショックをもう一回！！」
「・・・明久、もう体がもたない・・・。」
「こいつのことなら何でも知ってる！！このぐらいで死ぬもんか！！」

ばしゅ！！

「鼓動が戻ったぞ、明久！！」
「もう一息だよ！！」

ユウジ、死なせないよ！！
昨日貸した２００円を取り返すまでは、絶対に引けない！！

～明久サイドＯＵＴ

悠々と土屋君（ムッツリーニ）と共にＡクラスのデラックスサロンバスにのってきたもので、かなり早めについたらしい。

Ｆクラスのメンバーはまだ到着していないみたいで、お風呂を先にいただいたんだけど、一人ではいると旅館のお風呂は大きくてうれしい。
割り振られた部屋はＦクラスのいつものメンバーが集まっているところで、そのままゴロリと寝てしまった。

で、起きてみると、なぜか女子が部屋に乱入してきた。

「瑞穂、秀吉、こっちにきなさい！！」
「そこまでです！！　おとなしくしてください！！」

気づけば秀吉と僕は、女子の壁に囲まれていた。
で、うちのバカどもはなぜか窓から逃げようとしている。

「なにやってるんですか？」
「「「・・・いや、追われると反射的に逃げたくなるんだ」」」

君らはどれだけ後ろ暗いんですか？

「で、優子さん。こいつらの罪状は？」
「のぞきよ！！」
「「「「「のぞき？」」」」」

僕らは同時に首を傾げた。

「こいつら、こともあろうか、脱衣所にカメラを仕掛けて盗撮しようとしたのよ！！」

「「「「「えええええええ！？」」」」」

あまりのことに全員で驚いてしまいましたよ！！
あまりのことに驚いた僕ですが、仲間を信じる言葉を失っていません。

「待ってくださいっ。確かにうちのバカはスケベでどうしようもない奴らですけど、風呂場を盗撮するようなバカじゃありません！！」
「「「「そうだそうだ！！」」」」
「ましてや、ひとが嫌がる写真とか、本人が勘弁してほしい写真なんか撮影したり売りさばくわけがありません！！」
「「「「・・・そ、そうだそうだ・・・。」」」」

ん？
思わず視線を送るとなぜかデジカメを隠す明久と土屋君（ムッツリーニ）。
何となく、何となく指を鳴らすと襲いかかる女子。
取り上げられたカメラには、なぜか僕の寝ている姿。

・・・・・・

「バカに正義なし。抱かせるのは石の重さと罪の事実のみ！！」
そんなわけで、江戸時代ちっくな拷問を体験してもらうことにした。

「「のーーーーーーー！！！！！！」」

さぁ、二度とバカな真似ができないように学習してもらいましょう。

「そうですね、何といっても宿泊学習ですもの。」
「そうねぇ、宿泊学習だもんねぇ・・・。」

「「一晩中でも平気よねぇ？」」

「ユウジ、浮気は死刑。日本の法律」

「・・・そんな法律はねぇ。」

いえいえ、終身刑ですね。

座敷牢婚って、どの地方の風習でしたっけ？

とりあえず、バカはバカなりに行動力と実行力があるので、放置しては被害が大きくなると言うことで、全員グルグル巻きにして布団部屋に放り込んでおきました。

ああ、もちろん、ＦＦＦな人たちも一部同罪なので、拷問の後に布団部屋行きにしましたよ？

波乱の幕開けの学習合宿。

このときとどめを刺しとけばよかったと心底思った。

第十五話（後書き）

ちょっと頑張って書いてみましたです。

どんなもんでしょう？

第十六話（前書き）

うちの瑞穂ちゃんってば、かなり暴走ですね。

反省するけど後悔しない！

第十六話

あけて翌日。

Fクラス男子は死屍類累。

各クラス女子はビリビリしていた。

昨日詳しく聞いた話を総合すると、女子更衣室に隠しカメラがあったという。

実際そのカメラは録画専門で、電波は飛ばしていなかったらしいんだけど、録画されているというだけで最悪だ。

どこまで移っていたかは破壊されたために分からないが、見つけられたと一報が入った瞬間、怒りのあまり粉砕したというのだから恐ろしい話。

その怒りのままになだれ込んできた女子だったけど、なぜウチの部屋に？

「そりゃ、瑞穂たちの部屋には土屋君（ムッツリーニ）がいるし。」

「そうです、明久君もいます！」

それが論拠か。

どうにも頭痛がする。

「思うんだけどさ、そこまでまずいことはしないと思うよ？　やっても覗きぐらいじゃないかな？」

「覗きもだめです！！」

「乙女の柔肌をなんだと思っているのよ、瑞穂！」

「自覚してください！！」

「そうよ、秀吉といい瑞穂といい、自分の危険を自覚してほしいものだわ！！」

ん？

「男子と同じ部屋で寝てるだけでもマズいのに、同じお風呂にはいるなんて！！」

「配慮してください！　常識を考えてください！」

・・・・・・

覆わず秀吉と見つめあってしまった、僕だった。

午前中の学習時間にはどうにか復活したFクラス男子。とりあえず、妙な写真を持っていないかボディーチェックしたところ、全員が僕と秀吉の寝姿の写真を持っていた。

そんなわけで、全員制裁。

というわけで、お昼を女子と食べていると、坂本夫人登場。

二人の子供の名前という御題は異常に女子の間で盛り上がった。

ただ、坂本夫人のセンスが戦死しているのが十分理解できる。

「しょうことゆうじで、しょうゆ」

「味わい深い名前ですね」

「男の子だったら、こしょう」

「しょうゆって女の子の名前だったんですね」

「ユウジはどちらも気に入らないみたい・・・。」

「そのへんは、ほら、二人で暮らすうちにセンスや感覚がにてくるものです。その上で決めるのはどうですか？」

「・・・さすが瑞穂。友人代表は違う」

「任せてください、最近の写真は土屋君(ムッツリーニ)を通して細かく撮影してますので、お色直しが何十回あっても対応できるスライドを作って見せます。」
「・・・瑞穂、ユウジが居なければ惚れてたかも・・・。」
「だめですよ、坂本婦人。感激をそっちに持ってゆくのは反則です」
「・・・ごめん」
「・・・って、黙って聞いてりゃぁ、なにを電波会話してやがる！！」
「「・・・？」」
「心底不思議なものをみるような目でこっちを見るんじゃねぇーー！！」
「「・・・？」」
「だぁーーー！！　テンドンか？　テンドンなんだな！？」
「「・・・ああ、ユウジ、やきもち？」」
「くそー、まじでユニゾンしてやがんなぁ！」

豪快に転げ回るユウジを撃墜しつつ、僕らのご飯が続く。

「・・・はぁ、でも信じてほしいなぁ・・・、お風呂場にカメラなんかおかないのに」
「・・・実際おかしい。」
「そうじゃな、わしらが宿にきてから女子風呂などにいける時間なんぞなかったんじゃから」
「「「「「・・・・・・あ。」」」」」

思わぬ冤罪発覚。

周辺女子からの謝罪が入ったが、もちろん僕らのバカ大将はひと味違う切り返し。

「だって、僕らが設置すれば、リアルタイムで監視して、カメラ発見の瞬間に逃げ出してるもん」

入り乱れる拳、足、棍棒、警棒、刀、剣・・・・・・

ボコボコになった明久だったが、男子からは高い共感を得たのだった。

さすがに男ですねぇ・・・

とはいえ。

「人様の寝姿を無断で撮影する無礼ものではある、と」

にっこり微笑んで言う僕をみて、明久と土屋君(ムッツリーニ)はブルブル震えていた。

死屍累累・・・再び。

明らかな濡れ衣で酷いことをしたということで、女子の一部が明久達にお詫びの手料理を振る舞った。

それをみた他の男子達も飛び込んで、それは和やかな休息になるはずでした。

・・・姫路さんの手料理が半分を超える量を占めていなければ。

料理を手にして食べた男子の大半が崩れ落ち、泡を吹いて痙攣して・・・・。

「な、なにが起きたんだ!?」

「こ、これな、もしかしてテロか?」

動揺する男子だったけど、たまたま生き残った僕たちは知っている、それが彼女の料理のせいだということを。
とりあえず手に取った料理に悪寒を感じて、次々に別のものを選んでいるうちに、他の男子が倒れたんだけどね。
やっぱり経験がものをいうなぁ。

「まってください。これは純粋な事故です。殺人でもテロでもありません。食中毒ですらありません。」

パンパンと手をたたきながら僕が言うと注目が集まる。

「とりあえず、これは明久に振る舞われた料理です。彼に責任をとってもらいましょう。」
「え、え、え、どういう事、瑞穂？　え、なになに？　そのみんなで「あーん」体制は！？」
「もちろん、全身全霊を持って処理してもらうつもりですが、何か？」
「ナ、ナニカジャナイヨ、瑞穂は僕にし・・・・」
「それ以上言わせるかアタック！！」
「それ以上言わせないシュート！！」

がんがん詰め込んでゆく僕とユウジ。
さぁ、致死量を越えているんだから、何倍だろうと一緒です！！
薬も過ぎれば毒となるように、毒も過ぎれば所により薬になるでしょう！！

「味わえ、あきひさーーーー！！！」
「食らえ、正義の、「あーん」こうげきぃぃぃぃ」

土屋君（ムッツリーニ）と秀吉まで明久に詰め込む。

「僕たちの、人生のために」「食べきってください、明久！！」

数分の後、すべて明久の中に納められた。

明久曰く、三途の川メドレーリレーで、優勝したそうだ。

優勝商品は、三途の川の半額券。

三文でいいなんてお得ですね。

さて、さすがに誤解だったけど、それで警戒が収まるほど信用があるわけではない明久達は、女子入浴中は監視下に置かれた。

鉄人こと西村先生によって直接監視されているため、あらゆる行為が出来なかったはずなのに、今度は僕と秀吉の浴槽にカメラが仕掛けられていた。

もちろん怒りましたよ、僕は。

～明久サイド

えーっと、信じられないぐらい怒ってます、瑞穂。

ここまで怒ってる姿は見たことがない。

正直、先生ですらおびえてる。

回収されたカメラから細かく指紋を回収したり、無茶苦茶白衣が似合う科学者風の人たちが山ほど集まったり、男女か変わりなく指紋が回収されたりと、もう恐ろしい勢いで。

かなり強行に人権侵害を訴える女子もいたけど、盗撮写真や映像をとられた人間の人権について懇々と説明する瑞穂にビビって黙った。

以降、生徒全員の指紋を押さえた宮野小路憲兵隊による恐怖政治

が始まろうとしていた。

～明久サイドエンド

さて、指紋なんか回収しなくても犯人なんか分かっていた。
つうか一人だけでしたよ、ええ。
前から邪魔くさいほど、うざったいあいてでしたが、犯罪をしないだけマシだとおもっていました。
思っていましたがね！！

目の前で正座する某ドイツ帰国子女のスール。
証拠の品を並べてみせると、さすがに真っ青になった。

「自分の嫌いな男達に罪を着せつつ自分の欲望を叶える。実に陰謀めいて良いプランでしたね、清水さん。」

真っ白に血が引いた顔で震える少女。
もちろん許すはずもなし。

「一応、学園側には報告するつもりはないけど」

一瞬気色にあふれる彼女だったが次の言葉に凍る。

「ミナミには言うよ」

泣きわめき、許しを乞う彼女だったが、もちろん完全否定。
僕は当て身で彼女を眠らせて、そのままクラスの所までいった。
静寂につつまれたその部屋に僕は宣言する。

「犯人不明、捜査続行」

息をのむ周囲だったが、眉をしかめて立ち上がるミナミ。
こう言えば君が立ち上がることは分かっていたよ。
だから早足でその場を離れたけれど、ミナミはどうにか追いついてきた。

「瑞穂、あんたの怒りは分かってるけど、さすがにあの雰囲気はないんじゃないの？」
「わかってますよ。それに犯人も分かりました」
「・・・一応、名前を聞いていい？」
「君の態度が、今以降変わらないなら」

静かに名前を告げると、真っ青になるミナミ。
とりあえず、ボクが予想した犯行理由と本人の自供を告げると、膝から崩れ落ちた。

「わからない、何でそこまでするのか判らないわよ。」

そっと肩を抱き引き寄せると、しっとりと泣くミナミ。

「愛情とか、感情と言うものは人の視野を狭くします。僕の父も酷い人でした・・・。」

ボクがこの学校に入る前に父の陰謀で全寮制の女子高へ入れられそうになったことを話すと、ミナミの顔は引きつっていた。

「・・・でも、思うんです。あの時父の言うとおりに入学していたら、明久やミナミ達にあえなかったって。そう考えるとこの学校に来たのって正解だったんですよ」

だから、嫌なことがあっても信じて欲しい、僕たちが、友達がミナミを見捨てることは無いって。

「たとえ、彼女にしたくないランキングナンバーワンでも！」

ボクはその場でたこ殴りにされました。

あれぇー？　ボクはこういうキャラじゃないんですけど？

明久サイド

瑞穂による恐怖政治は「主に拳による」ミナミの説得で終焉を迎えた。

ありがとう、ミナミ、と感謝したら、真っ赤になってそっぽ向かれてしまった。

うん、やっぱりミナミには嫌われてるなぁ。

仲直りに何かしたほうがいいかもしれないけど、何も思いつかない。

出来れば自分で思いつきたいけど、僕はこういうこと苦手だから・・・。

そうだ、瑞穂に相談しよう。

瑞穂なら女心に詳しいはずだし！！

明久サイドエンド

とりあえず、僕の暴走で落とし所にしようと思っていたのですが、バカはバカ以上にバカでした。

宿泊合宿中ののぞきについて、某シスターでスールが自供したのです。
全生徒教員の前で。
さらに、その事実を僕が把握していて、さらに庇ってくれていたと激白し、周囲に涙を誘いました。
さすがに出ていけませんよ、ええ。
そんな激白を襖一枚へ立てた廊下で聞いていたんですが、当然のように質問が飛びました。

「何でそんなことをしたんじゃ？」

我が友、秀吉の問いに、女子更衣室の真相を語ったところ明久の激白があったが、止められた。
その先があったからだ。

「では、わしらの脱衣所は？」

そう、僕暴走の原因は、というところで、シスターでスールな清水さんは大いに叫んだ。

「・・・瑞穂様と秀吉さんが男だなんて、あり得ませんわぁ！！」
「「「「「え？」」」」」
「瑞穂お姉さまと秀吉さんが男ではないという確たる証拠をつかんで、前項に広める、それが目的でしたの！！」
「「「「「あーあ、なるほど」」」」」
「わかる、わかるよ、清水さん！」
「そうだ、そうにきまってる！！」
「秀吉が男？ありえんだろ！？」
「そうだ、宮野小路が男なわけがない！！」
「「「「「おおおおおおお！！！！」」」」」

このぉ・・・・・・・

「そこに直れ、バカ集団がぁ！！！」

夏期合宿における伝説が生まれた。
鉄拳による血の雨事件
詳細は語られなかったし、教師もみんな口をつぐんだ。
ただ、唯一、清水みはるの停学一週間だけが決定したのであった。

～おまけ～

帰りは流れ解散なので遊びに行くことにしたのですが、Fクラスの仲間に加えて、坂本夫人・工藤さんが参加してきました。

「おい、瑞穂。なんかツメに入ってないか？」
「は？　なにを言うんですか。」

あたりまえじゃないですか！　坂本の旦那～。
楓さんと土屋君（ムッツリーニ）に頼んで、この自由時間中の写真をバカスカ撮ってもらっているのですよ。
むろん、二年後に控える挙式のために。
頑張れ、ユウジ。君の幸せは決まっているんだから、後は覚悟だけですよ？

そんな坂本家の未来を祝福しつつ、僕は浮かない顔の明久をつつく。
聞けば色々と失敗してしまったらしい。

まぁ、不幸の積み重ねがピラミッド状態になっている明久には珍しくないんですけどね。
とはいえ、メール誤送信＋誤解累積＋即席カップル状態ってどこのマンガの主人公ですか、君は。

「誤解は解きたいけど、でも、ミナミも傷つけたくないんだよぉ・・・。」

半泣きの明久を激写させるべく指サイン。

「（バカの、アップ、よろ）」

遠くからシャッター音が連続する。
よし、これでいい、いい仕事を期待してますよ、土屋君（ムッツリーニ）。

「明久。ミナミのことは嫌いですか？」
「・・・そういう聞き方は卑怯だよ」
「じゃ、恋人にしたい人がいるんですか？」
「いないけど、だからってお試しとかで付き合っていいほど軽い関係じゃないと思うんだ。」

そうですね、僕たちは結婚を大前提にして付き合っている幼なじみ達を知っているだけに、恋愛には慎重ですね。

「いまのさ、いまの友達の関係が崩れてしまうぐらいなら・・・・」
「明久のバカ！！」

僕の拳が明久の顎をとらえてアッパー。
浮き上がったところで内角からえぐり込むように、
打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打つべし打

つべし打つべし打つべし！！
全力にボコボコにしたところ、３ｍほど吹っ飛ぶ明久。
しばらくぐったりしていたけれど、急に起きあがった。

「・・・な、ないするんだよ、瑞穂！！」
「明久の弱虫！！」
「・・・！」
「明久は、バカでバカでバカでどうしようもないほどバカですが、それでも前に向かって生きているのがすばらしい男なんですよ！」
「・・・瑞穂、バカって言い過ぎ」
「関係ありません！　明久、きみは誤解されたのは事故だと言いますが、その誤解を解かないのは誰が悪いんですか？」
「・・・あ。」
「さすがに誤解した方が悪いとか言いませんよね？」
「・・・うん」
「ならば、悪いのは明久、そうですね？」

うつむいて頷いた明久に僕は優しく言います。

「悪いこと、誤解させたこと、正面から謝りなさい。運が良ければ半殺しですみます。」
「は、半殺しは決定なの？」
「・・・このまま誤解させたままなら、殺された方がいいって言う目に遭いますよ？」
「・・・・ガタガタブルブル」

そんな指導のかいあって、学園に帰るまでに誤解は解けたそうです。
直接ミナミからお礼を言われました。
え、なんで？

「・・・あいつがね、謝ってきたのは腹立ったけど、それでもね、『男友達みたいに付き合ってるけど、ミナミがかわいい女の子だって思ってる』って言ってくれたのよ」

うわ、明久男前！

「でね、ちゃんと正直に言えば半殺しですませてくれるって瑞穂に言われたって。」

・・・なんでしょう、すごい寒気がします。

「ねぇ、瑞穂。あんたにとってのウチって、どういうキャラなのかしら？」

ダッシュ！！

さらば友よ、また会う日まで！！

「こらー！待ちなさい！！　アキは半分ですませたけど、瑞穂はちょっと調整するんだからー！！」

くそー、明久め、余計なことを言いましたねぇ！

思わず駅構内を走り、明日への脱出をはかる僕でした。

追記

なんだか、激しくキャラと違う目に遭っている気がします、ええ。

第十六話（後書き）

はい、合宿終了です。

原作とは違い、ユウジは秒読み状態ですし、明久は結構男前です。

書いてて違和感ありましたが、クラスに戻るとそれなりに戻ります

w

第十七話（前書き）

新春お年玉アップ！！

って、お年玉が増額したわけではありませんw

第十七話

吉井明久の朝は遅い。

が、瑞穂の家に泊まると無理矢理早い。

というか早く起きて体操をしてランニングをして、そして食べさせてもらえる朝食が美味しすぎるので猛烈に早い。

その後、交互にシャワーで身支度を終えて、髪の毛を乾かす程度まで時間の余裕があるのは、すべて朝食のおかげだと明久は思っている。

「じゃ、いってきまーす」

「楓さん、戸締まりお願いしますね～」

「はーい、お二人ともいってらっしゃーい」

アパート住まいとは思えないメイド付きアパート。

それが瑞穂の家であり、吉井明久の生命線であった。

「あ、アキ、瑞穂おはよ～」

「美波、おはよー」

「島田さん、おはようございます」

「この時間だって事は、瑞穂の家に？」

「いやーだって、あそこ、ご飯美味しくて」

「明久、君の家の主食は「ご飯」とは言いません」

「そお？」

「塩水と砂糖水とサラダ油を食事と認めたら、人間として負けた気

がします。」
「・・・アキ、あんた、どんな生活してんのよ」
どんよりとした視線の島田さんでしたが、明久は明朗に普段お食生活を告白して更に呆れられました。
「でもさ、死にそうになると瑞穂が助けてくれるから助かってるよ。友情って大切だなぁ。」
「明久が餓死する前に、もっと恐ろしいことが起きることを防止しているだけです。」

そう、たとえば、明久がガリガリになったとしよう。
栄養不足とか食事をとっていない状態で学校にきたら・・・・・
『私に任せてください！御料理得意なんです』
『あ、それじゃぁお弁当を作ってきますね』
『・・・あの、お味はどうですか？』

この三連コンボで明久死亡遊技。
見事毒殺王がクラスから現れることになってしまう。
そんな青春の暗い影を防止しているのですから誉められても責められる謂われはありません。

そんな確信を秘めつつもぼやかした会話を交わしながら、教室まで行くと、何故か下半身下着姿でワイシャツのユウジ発見。
「「「クールビス？」」」
「こんな中途半端で変態的なクールビスがあるかぁ！！」
聞けば事の起こりは坂本夫人の可愛い焼き餅だそうだ。

夫の浮気の痕跡は携帯電話にあるということで、見せろ見せないの大騒ぎ。
最後にゃ坂本夫人が実力行使をしてズボンごと携帯電話を奪っていったそうだ。

「愛ある風景だよね」
「そうですね、可愛い独占欲じゃないですか」
「こんな格好にされたのが、登校途中じゃんければな！！」

「・・・・」

無言の僕たち。

「ああ、放置プレイというやつですか」
「断じて違う！！」
「裸ワイシャツは男の夢ともいいますし。」
「それは自分がしたい夢じゃねぇし、そんな夢は明久の仲だけで十分だ！！」

怒りのユウジでしたが、ＨＲで現れた西村先生に「奔放な性生活も大概にしろよ」と心温まる忠告を受けていました。
全ユウジ号泣。
いいなー最近明久よりいじりがいありますよね？

「瑞穂、今、すんごく不穏なこと考えていなかったか？」
「まっさか～」

当たり前じゃないですか！！

そんなやりとりのあと、数日。
自分の家から登校しているのに明久が早くきている。
遅刻をしない、ワイシャツがぴちっとしてる。
何とも不信です。
あの明久が自分落ちからだけで朝早く起きるだなんて物理的にあり得ません。
そういえば、ワイシャツにもアイロンがきいてますし、血色もいい。
少なくともそろそろ顔色が悪くなってウチにくる頃なのに、と首を傾げます。

「明久、何を隠してる」

まさに直球のユウジ。
最近貯めているストレスを明久で晴らそうというのが見え見えですね。

「な、な、な、ナニモカクシテイナイヨォ？」

なんて判りやすい動揺。

「・・・さては、女だな？」
「ぶばぁっ！！」

瞬間的に鼻血を噴出する土屋君（ムッツリーニ）。
反応がよすぎます。

「そ、そ、ソンナコトアルワケガナイジャナイカァ！」

「うそね」「うそですね」

島田さんと姫路さんによる魔女裁判も真っ青な速攻判決。

「よし、今日は明久の家にガサ入れだ」

「「「「おお！」」」」

「だ、だめだよ、いま家がすんごく散らかってて・・・」

「お掃除任せてください！！」

力のはいる姫路さん。

料理以外なら家事が得意らしい。

「・・・えっと、散らかってるのが・・・その・・・エロ本だから！！」

「・・・全部片づけます」

「・・・全部捨てるわ」

有罪判決証に自らサインした明久は、真っ白になっていたのでした。

えー、実に衝撃的な風景が広がっていました。

ガクガク脅して開けさせた明久の家の扉の向こうには、ブラがぶら下がっていました。

そう、カップにして「E」ぐらい。

有罪は確定しました・・・。

「だめじゃないですか、明久君」

囂々と黒い気配を発生させた姫路さんはほほえむ

「明久君にはもっとカップ数が少ないのがお似合いですよ？」

「「「「（認めない気だ・・・。）」」」」

そのスルー能力に冷や汗をかきながら、ガサ入れを続けるとでるわでるわ。

化粧道具、女物のスーツ、香水・・・・。

「明久君も努力は認めますが、こういう大人っぽい道具は高校卒業した後でもいいと思いますよ？」

「「「「（認めないんだ、つえー）」」」」

その強硬な牙城も一気に崩れる。

「明久、このダイエット弁当・・・・」

「もう否定できませんーーーー！！！」

「「「「（よわ！！）」」」」

確かにわざわざ作る弁当でダイエットなんかを明久が考えるわけがないんだけど、その結論もどうかと思いますよ、姫路さん。

「あら、アキくん。お客さんですか？」

「おや、瑞穂さん。どうしたんですか？」

そこに現れた巨乳美人に驚いたんですが、それ以上になぜかウチの楓さんが現れたのには驚きました。

聞けば、食材を買いすぎて立ち往生しいていた吉井姉を見つけた楓さんが、この家まで荷物持ちにつきあって来たそうだ。
なるほど、あのEカップブラも化粧品もお姉さんのでしたか、納得です。

「吉井怜（よしいアキラ）です。よろしくお願いします」

聞けば、吉井家はずいぶんとバラバラだ。
姉である怜さんはアメリカ留学、ご両親は海外出張、で、息子はたびたび友人宅に泊まり歩き。
なんだか絵に描いた家庭崩壊なのに、明久のキャラクターのせいか感じさせません。
さすが吉井明久、おそるべし。

「瑞穂、なんかひどいこと考えていない？」
「ええ、当然考えてますよ」
「うわ、なんで直球の返答が！？」
「だって、明久に遠慮しても仕方ありませんし」
「ひど、瑞穂ひど！！」
「あはははは、ほめても何もでませんよぉ」
「そう言いながら何で英語のドリルを鞄から出すの、ねぇ！？」
「いえいえ、実は西村先生から明久にドリル一冊勉強させることができれば、報奨金が出ることになっているだなんてありませんからねぇ～」
「いやーーー！　姉さん助けてぇ！！」
「不純同性交遊はみとめます♪」
「認めちゃいやーーーー！！」

もう、姉も姉なら弟も弟ですね。
ただ単純にいやがる明久にドリルをやらせているだけなのに。
そこそこ、島田さん、姫路さん、赤くならないの！！

そんなこんなで、屍になりつつもドリルを終えた明久でしたが、実は歴史＝ユウジ、数学＝島田さん、国語＝姫路さんと、暗殺者は群がり、陵辱系ヒロインのような悲鳴とともに明久の夜は更けていったのでした。

翌日登校すると、がっくりとうなだれた明久発見。

「よごされちゃった・・・。」

聞こえが悪いですね。
無理やり三セットほどかましただけなのに。

「・・・あんなに、むりやり・・・。」

まぁ、無理やりなのはわかってますが、全て貴方のためですよ、ええ。

「・・・きむすめじゃあるまいし」

これこれ、ユウジ。それでは私たちが悪者ですよ。

「・・・F組で吉井君が無理やりさせられたというのは本当かね！

？」

久保君はやいですねぇ。

「なんで僕を呼んでくれなかったんだぁ！！」

赤裸々な君に乾杯。

勿論、明久が泣きつく先は「秀吉」。

「うわぁーん、ひでよし～」

「よしよし、このドリルをやれば、いくらでも慰めてやるから、頑張るんじゃぞ～」

「神も仏もいないのかぁ！！」

たとえ居たとしても、君の味方にはならないでしょう。

絶対僕らの側に立って、君をいじり倒すに決まっています。

そんな確信があるんです、ええ。

「さって、それじゃあ僕らも予習しますか。」

「え、なんで瑞穂たちも予習なの？」

「あのですねぇ、そろそろ試験ですよ？」

まるでこの世の終わりかのような表情の明久。

「あのですね、これでいい成績を取れば、また試召戦争の時に活躍できますし、戦略的にも幅ができます。加えてバカや変態に対抗できるんですよ？」

不意に色々と思い出したらしい明久は、硬い表情で頷きました。

自分の利益よりも友達を思うその心は称賛に値することだと思い

ます。

「それに、そろそろGクラスが反撃にくる頃ではないかと・・・・。」

「・・・ああ、あそこ、ね」

視線の先のプレハブ校舎。

名称的には「E」クラスなんですけど、なぜか「G」クラスとしての呼称が通ってしまった可哀想な人たち。

「・・・なぜかって、あんた、猛烈に酷いこと言ってるわね」

「え、何か僕に関わりありましたっけ？」

「伝説のGクラスはあんたの発案でしょうが。」

「・・・そんな昔のことは覚えていません」

「昔だってことと、覚えていない内容は解ってるってわけね」

ぐ、島田さん、そういうつっこみは明久だけに愛を込めて実行してください・・・。

案の定ともうしますか、経験が生きない人たちと言いますか、Fクラスの成績はほぼ全滅。

ですが、全滅メンバーの筆頭に明久は入っていませんでした。

とりあえず、Eクラスレベルの成績が取れていたことが驚きならば、加えてドリルも自主的に消化し始めました。

あまりのことに西村先生（てつじん）は救急車を呼ぼうとしたぐらいですが、明久の意欲を下げないようにみんなで取りやめさせました。

「ふむ、あれ、だな。そう、あれだ、吉井の双子の弟、この線だろう！　双子の片割れと言えば優秀と決まっているしな！！」

日々、こんな精神的解決案を思いつく西村先生(てつじん)も、Ｆクラス色に染められてきていますよね。

とはいえ、クラス大半がだめな成績を取ったということで、連帯責任という名の集合管理を宣言し、七月中の夏休みは補習という名前の登校日が開催されることが決まりました。

せっかく赤点ラインをほぼ超えたというのに補習かよ、と不満そうなメンバーが多い中、明久は結構うれしそうでした。

何かときいてみると、

「・・・家にいるとさ、姉さんにからかわれて身が持たないんだよ」

人にはいえない大人のキスを強要したりとか、夜中に下着姿で布団に入り込んできたりとか、入浴中に水着で攻め込んできたりとか・・・。

「それって、今まで開いていた姉弟(きょうだい)の関係を詰めようとしているだけじゃないですか？」

「違う、あれは絶対違う。むかしから姉さんはそうやって僕をからかうんだもん。だから絶対に違う！」

思わず背中に冷たい汗が流れました。

もしかして、日々の楓さんのスキンシップって、義母になるためのスキンシップじゃなくて、単純にからかわれていたのだろうか、と。

何しろ明久が怜さんにされている内容と僕が受けているスキンシップの内容が酷似してるのです。

さりげなく、本当にさりげなく明久の現状を聞き出すと、本当に

似ていることがわかりました。
ただ、さすがに風呂上がりの着替えを出してもらったら、バニースーツかナーススーツの二択という究極カオスな現実はありませんでした。
やっぱり、吉井一族は恐ろしいですね。

「で、どっちを着たんですか？」
「ナースキャップで前を隠して、部屋までダッシュ」
「・・・な、なんてマニアックな！！」

久保君、いつの間に現れたんですか？
そのうえ、土屋君（ムッツリーニ）も真っ青な鼻血を流して倒れないでください。
ああ、ビクンビクンして震えてるぅ！！
なに、この怖い生物はぁ！？

「・・・瑞穂、これがそのときの写真」
「なんで、そんな写真があるんですか、土屋君（ムッツリーニ）。」
「紳士の嗜み」

そこの紳士という名の変態の話ですか！？

「・・・い、いくらだね？」
「・・・価格は、要相談」
「ふ、よかろう、全力を尽くそう」
「っていうか、絶対嫌がらせだよね、何でそんな写真があるの！？」

まぁ、たぶん、明久のお姉さんの写真を撮るために張り込んでいたら、もっと衝撃的な写真が撮れてしまいました、ということじゃないですか？

「・・・さすが瑞穂。」
「いえいえ、さすがに商売のためとはいえ、男の裸を撮りに潜入するとは思えませんし。」

あはは、と笑う僕の視界の端で、島田さんと姫路さんがお財布をのぞき込んでいます。
ああ、この二人も「F」なんだなぁ、と感慨深いですね。
土屋君(ムッツリーニ)も、まっとうな写真をばらまけば、女子の一部や久保君からどんどん収入があるのに。

「・・・すでに「アキちゃん」でレンズ二本買った。」
「そこまでですか、うちの学校は・・・。」

さすがに島田さん・姫路さん・久保君の購買力ではそこまでいきませんから、そうなると全校単位と言うことになります。

「地域が一体になってアキちゃんを応援してる。」
「・・・怖い土地ですね、ここは」

まさか、購買層が学外にまで・・・、アキちゃん恐ろしい子です。
それでですか、最近明久と帰ると、妙な視線を感じるのは・・・。

「それはロイヤルガーダー。」
「くぅ、さすがアキちゃん、おそろしいですね」
「くそぉ、なんで僕には安住の地がないんだ！」
「あ、そうだ、ユウジの家にでも行けばいいんじゃないですか？」
「・・・ユウジ、泊めてくれない？　今夜は帰りたくないんだ・・・。」
「てめぇ、瑞穂。なぜ俺を巻き込む・・・ててて、いてーー！　」

突如坂本夫人登場。

「・・・やっぱり浮気の相手は吉井。」

「ちがうちがう、全然違う！！　翔子、おまえは誤解してるぅ！腕はそっちの方向にはまがらなぁーーーー！！！！」

流石は坂本夫人、土屋商会印（ムッツリーニ）の盗聴器を常に使っているとは・・・。

「・・・巷で噂。吉井を射止めるのは、ユウジか瑞穂って。」

「秀吉を入れてよ！！」

間髪入れずそれですか、明久。

君も病んでますねぇ。

まぁ、不純同性交遊は親族から認められていますからねぇ。

「「そこのところを詳しく！！」」

久保君に続き、Ａクラスの木下優子さん降臨。

こんな話に反応するとは、腐ってますねぇ。

最近、優等生の仮面より腐女子の仮面の方が有名ですしねぇ。

「瑞穂、あんた、即死したいようなこと考えてる？」

「まっさかー」

やばいやばい、優子さんの方は洒落がききません。

てな騒ぎが日常のように続く文月学園も、夏休みを前にして浮かれているのでした。

第十七話（後書き）

夏休み前の準備話みたいなかんじです。

次回はみんなで「うみだ～」ってやるつもりですが、もちろんあの三人も追加されます。お楽しみに。

第十八話（前書き）

とりあえず、海にきましたw

第十八話

明久の提案で、補習開けの日から仲良しチームで海へ行こうという話になりました。
はじめは近場で済まそうと思っていたのだけれども、怜さんが車を出そうといい始めたあたりで話がずれます。

「で、宿はどこにするんですか？」
「は？　日帰りですよ？」
「そうだよ、姉さん。」
「いい機会ですし、知り合いの別荘を借りることが出来ます。泊まりがけで行きましょう。私が同行するので、不純な異性行為は出来ませんが。」
「しないよ、しないってば！」
「聞いた話では、アキ君に想いを寄せる同性が多数だとか・・・・。」
「なに、なにを期待してるの、姉さん！？」
「・・・ＢＬ、すばらしいですね？」
「いやーーー！　そんなものを期待しちゃいやーーー！」

で。
借りた別荘というのが、楓さん経由の鏑木家別荘だったりする。
なんとも因果な話ですね。

参加メンバーは、いつもの２Ｆメンバーズ。
明久、秀吉、土屋君（ムッツリーニ）、ユウジ、島田さん、姫路さん、僕。
これに加えて、坂本夫人、優子さん、工藤さん、久保君が加わる

と、なんとなく文月学園なメンバーになります。
で、今回はさらにこれに加わるメンバーがいます。
なんと、マリヤとそのお友達である貴子さん、そして十條紫苑さんまで参加してくれるというのです。
この話を聞いて、アキちゃん基金を切り崩し、カメラとレンズを新調した土屋君（ムッツリーニ）は男の中の男なのかも知れません。

とはいえ彼は現在出血多量。
予想していたとはいえ、そのとおりの結果に満足している僕でした。

～明久サイド

到着した別荘は、周辺の別荘よりも小さめだったけど、それでもスゴい重厚感で趣味の良いものだった。
いや、語ってしまってこんな事言うのは何だけど、周りの別荘がこれ見よがしにギラギラしてて格好悪いんだ。
それに比べて目の前の別荘は、控えめでありながら落ち着いた感じで、まさに「別荘」ってかんじだった。
それに比べて、二件先のあの別荘は、ちょっとないよな～
そんな僕の一言に、視線を逸らす厳島貴子さん。
どうしたんですか？

「・・・あの別荘は、厳島本家のものなんですの」
「・・・ごめん」
「いいんですのよ？」

半泣きの貴子さん曰く、本当に厳島はヒドい成金なのだそうだ。

ただ、幼い頃はそのことに気づかず、結構嫌な性格だったと語る貴子さん。
ただ、マリヤさんと友達になって性格が改善すると、自分の家が如何にダメな家かが解ってしまい、寮制に切り替えて実家と縁を切る方向に行ったそうだ。
で、縁を離すと離すほど嫌な家であることが解ってしまう実家を、すでに「本家」という形で切って考えないとやっていられない気分なんだそうだ。
お金持ちも大変だよね。

「・・・でも、マリヤさんや紫苑様、そしてみなさんとお知り合いになれたのは、今の家に生まれたからかもしれません。その点だけは感謝していますわ」

・・・なんか、そういう前向きな気持ちっていいな、そんな風に思う僕だった。

～明久サイドエンド

今回は楓さんにも休暇をということで、料理や洗濯をみんなで手分けすることになりました。
もちろん料理は僕と明久とユウジの担当です。
身内や友人の料理に苦しめられているせいで、腕はなまじプロより上ですよ？

「でもさぁ、お金持ちって、キッチンまですごいよね」
「そうだな、おれはこのスパイスホルダーが欲しい」
「そうですか？　単に趣味なだけじゃないかと」

ここ似並んでいるスパイスは、ネットが使えれば誰でも手に入るたぐいのものばかりですし・・・。

「瑞穂、種類が問題なんじゃねぇ、チョイスの問題だ」

ユウジ曰く、このスパイスのチョイスは「かなり」の目利きなのだそうです。
内心照れましたが、チョイスの理由で頭痛を感じました。

「これとこれとこれの組み合わせで、速攻煙幕」

目つぶしや火薬の組み合わせを実践して見せて、ため息をつきました

「これだけの常備、優れた「プロ」に違いない。さすが師匠の関係者だ。」
「・・・どんなプロだというのですか・・・。」
「そりゃ、技で言えば島田的、いや、姫路の料理的？」

・・・いやなプロがいたものです。

「アキ～こっちの掃除は終わったわよ～」
「明久くーん、お風呂場もＯＫですよ～」
「は～い、じゃぁ、ぼくらもお昼を作ろうか！」
「「よっしゃ！」」

お昼をすませて、早々に海にいきましょ～。

別荘地からすぐそこにある海岸は、別荘利用者だけのビーチなので、気楽に利用できます。
昔からの人たちは、日差しの強い時間帯は避けるので、この時間は貸し切り同然です。
だから・・・・

「「「「「「うみだ～～～～～！！！」」」」」」

女性陣は例外なく大胆な格好です。
島田さんも姫路さんも、優子さんも坂本夫人も工藤さんも、みんなみんな冒険しまくっているおかげか、土屋君（ムッツリーニ）は別の出世界に旅立とうとしています。

が、これだけにあらず。
マリヤ、紫苑さん、そして貴子さん。
正真正銘本物のお嬢様まで参加した海は、もう、男達の居場所なんかないとばかりの空間です。
吉井姉＋楓さんの水着なども加わった時点で、秀吉とボクを除く男子全員が昇天していたのでした。

ああ、勿論久保君は明久の半裸で出血多量になりましたよ？
玲さんも「・・・生ＢＬ，いいですね・・・。」と微笑んでいたけど。
・・・どうも、あの人は警戒心を煽るんですよねぇ。

「どう、瑞穂ちゃん。興奮する？」
「ええ、熱いリビドーが弾けそうでワクワクしますよ？」
「・・・冷静に言われても嬉しくなーい。」
「はーはー、言いながらってボクのキャラじゃないですよ？」
「そこがいいのに・・・。」
「でも、マリヤさん。その冷静さこそが求められる資質じゃございませんか？」
「そうでしたね、紫苑様！！」

きゃー、とか何だか盛り上がるお嬢様組。
何となく、何となくですけど、陰謀の香りがしますね。

「あ、あの、瑞穂様。我が校の学園祭にはいらしていただけるのでしょうか？」
「勿論じゃないですか、貴子さん。非常に楽しみにしてますよ。・・・ねぇ？」
「「「「「いえーーーーす！」」」」」
「・・・よかった。」

本当に嬉しそうに頬を緩める貴子さん。
というか、こっちも色々と緩みそうな、そんな感じです。

「ね、瑞穂ちゃん。学園祭には迎えをさせるから、楽しみにしててね？」
「（鏑木の運転手ならお断りですよ？）」
「（大丈夫だって！普通の人を回すから）」
「（まぁ、それならいいけど・・。）」

まぁ、今は楽しげな海に向かいましょう。

それがいいに違いありません。

さぁ、土屋君（ムッツリーニ）。君の命の跳ね所ですよ！

第十八話（後書き）

もちろん、海的なイベント戦闘はありますw

次回をお楽しみに

第十九話（前書き）

お久しぶりの更新です！

書けない書けないと唸っていましたが、書いてみるとぴゅんぴゅん話が飛ぶ飛ぶｗ

第十九話

ほぼ、プライベートビーチといっても、別荘地の付属ビーチだからそれなりに人は来る。
ただ、お上品な方々が多いので関わってくることは無い。
弾けたい人たちは海外に行くわけだし、静かにしたい人は山奥に行くから。
だから、それなりに楽しみたい人たちが国内のこの辺に来るわけです。
勿論、知人友人は多いのですが、僕がお父様と縁を切っているのは知っているので、逆に復縁したのかという興味はあるみたいです。

「瑞穂ちゃん瑞穂ちゃん」
「ああ、葦原のおば様」
「・・・戻ったの？　実家に」
「いいえ、実家ってどこですか？　ボクは昔から宮野小路ですよ？」
「はぁ・・・、心配してる人もいるのだから、無茶はしないでね？」
「ありがとうございます、おば様」

てなかんじで、こそこそと話しかけてくれる。
勿論、興味半分で来る人もいるけど、多くの人たちはボクの事を昔から知ってくれている人なので、お父様との仲違いを快く思っていないのでしょう。
ですが、あのお父様と向き合うことはありません。
徹底的に縁を切りますよ、ええ。

「そんな頑固な所も、お母さんそっくりね」
「そうなんですか？」

「ええ、そっくりよ」
それはなんとなく嬉しいですね。
「見た目も正確もそっくりだから、貴方のお父様も暴走してしまうのね」
・・・全く嬉しくありませんでした。

芦原のおば様から頂いたおすそ分けのクーラーボックスには、大量の冷えたジュースが入っていました。
こういう気遣いができる人って少ないんですよね、と苦笑いでお返しを考えておく。
多分、この量は、お孫さんたちが来てもいいように買っておいたけど、来ない連絡があったということでしょう。
だったら、うん、あとで楓さんと一緒にお邪魔して、食事でも作りに行きましょうか。
うんうん、明久あたりも連れて行けば、結構喜んでもらえそうですね。

「みんなー、ジュースの差し入れがあったからのまなーい？」
「「「「「はーい」」」」」
ワラワラと集まる女子部のみなさん。
・・・・？
「秀吉、みんなは？」
「あそこを見よ」

秀吉が指差すほうでは・・・・

・土屋君(ムッツリーニ)：ミイラ状態で悶絶
・ユウジ　：　頭から腰あたりまで砂に埋まっている
・明久　：　女性ものの水着を着せられて、泣き伏してる。

「いつもどおりの光景ですね」
「それはそうなんじゃが、納得し切れん反応じゃなぁ」
「え、何か疑問でもありますか？」
「あるといえばあるんじゃが、いつもどおりで納得してしまえるのも問題じゃのぉ」

まぁ、現実は目の前にあるのだから、気にしたら負けですよ。
というわけで、ユウジは坂本夫人が回収、土屋君(ムッツリーニ)をパラソルの下に放置、明久はそのまま連行して女子部の皆さんの前に晒す。

「いやーーーー、やめてーーーー、こんな僕を見ないでーーーーー」
「アキ君、とってもよくお似合いですよ♪」
「あ、あ、あき、その水着、私の予備だけど、似合うからあげる」
「明久君、とってもよくお似合いです！」
「いやーーーーーーー！！！」

そういえば久保君は？

「天に召されておるな」

視線の先では久保君が、両目耳、鼻からも血を流して燃え尽きていた。
真っ白ですね、うん。

某成り上がりボクサーのように真っ白です。
この海水浴で一番輝いてるかもしれませんね。

「瑞穂さん、男性とは凄まじいですわね」
「貴子さん、これが一般の男性だと思われると語弊があるのですが」
「そうなのですか？」
「そうなのです」

まぁ、中身はみんな同じだろうけど、普通の人はもっと表に出ないように努力しているものなのです。

「瑞穂様、どなたからの差し入れでしたか？」
「芦原のおば様。あとでご挨拶にいきましょう」
「・・・それがよろしいですね」
「明久も連れていくから」
「あら、どうしてですか？」
「ああいうキャラは、いい気分転換になりますからね。その上料理上手。顔をつながせた方がいいかなーっておもいまして」
「それはそれは楽しそうなお話ですね」

ふふふふ、と腹黒モードの楓さん。
うんうん、みんな明久イジリレベルが上がってきましたねぇ。
明久には普段の食事代の代わりといえば拒否できないでしょうし。
あとは、今晩お食事当番を姫路さんにすれば自主的にコッチに来るでしょう。
ああ、怜さんも当番に入れれば鉄板ですかね。

芦原さんの別荘におじゃました僕と明久と楓さんは、かなり歓迎された。
そして明久のパエリアは絶賛され、来年も食べたいから来てほしいとまでいわれた。
明久も手放しの絶賛を心から喜び、そして、いろいろと考えるところがあったようだ。

「ねぇ、瑞穂。なんで僕も連れてきたの？」
「んー、打算ですね」
「打算？」
「ええ、打算です」

明久は芦原のおば様の事情を知らない。
同情も哀れみもない。
だから、ジュースをおごってくれたお礼に全力を出した。
喜ばれたい、ありがたいという思いを全力で。
純粋に、本当に純粋に思った心が相手に伝わり、相手の喜びに変わる。
塞ぎがちだった心が癒される。
それは、数年ぶりの楽しい夜だったと思われる。

「ボクは芦原のおば様に喜んでほしかった。明久を利用してでも楽しい時間を過ごしてほしかった。だから、打算なんです」

ボクのそんな告白に、明久は苦笑い。

「いいんじゃないかな、打算。瑞穂は芦原さんに喜んでほしかった、それだけなんだから。んで、僕はそれに協力した。ただそれだけでしょ？」

・・・はぁ、本当に明久はお人好しですね。
心の底からそう思いますよ。

僕たちは互いに微笑みあった。
その時はまだ知らなかった、現在進行形で地獄が展開している別荘に向かって。

地獄の釜はいつでも開いている。
この瞬間も死亡フラグは立っているのだ。
頑張れ瑞穂、負けるな明久。
君たちの命は風前の灯火だ！！

第十九話（後書き）

オリジナル展開ですが、結構女学院空気ですw

まぁそんな感じで、次回は早々に更新します～

第二十話（前書き）

海からのコンボw

別荘編はこれでおしまいです。

第二十話

明久バリアー、強力ですね。

別荘に帰った瞬間充満していた刺激臭を感じてダッシュで逃げる僕と明久でしたが、僕が捕まれた瞬間、明久を身代わりに逃走。

これを呪術的逃走といいます。

テストで出ますよ？

向こうも生け贄筆頭がいるのだから満足すればいいのに、なぜか僕を追いかけてくるユウジ、土屋君（ムッツリーニ）、秀吉。

・・・と思いましたが、これは僕を追うという口実を使った逃走だという事に気づいた僕は逃走ルートを変更しました。

近場の公園に逃げ込んだところ、土屋君（ムッツリーニ）、ユウジ、秀吉が集まりました。

「み、み、み、瑞穂、貴様、なんつう恐ろしいことを仕掛けやがった！」

「・・・三途の川を、メドレーリレーさせられた」

「・・・瑞穂、貴様、言い訳を、するのじゃ」

仕方なく、芦原のおばさまの話をすると、ユウジは不機嫌そうに眉を寄せます。

「だったら始めから皆に言えば・・・」
「目に涙を浮かべて感動して、「私がお食事を作りにいきます！」って言い出す人が出て、いらんパニックが起きる気がしますが？」
「・・・・・そうだな」

そのための食事当番であり、そのための生け贄ですし。

「瑞穂、貴様、わしらを売ったな？」
「まっさかー」
「では、なぜ視線を逸らす？」
「美少女顔の秀吉を正面から見たら惚れちゃいますよ」
「なっ！！」
「冗談冗談」

まぁ一応、女学院組は避難してもらっているので、被害はうちだけで済むはずですしね。
とはいえ、あの別荘、無事ですかね？

ある程度時間をつぶしてから別荘に戻ると、いろんな色に変色した明久が、ビクンビクンと震えている。
どうやらすべて始末が終わったようだ。
悪徳軍師瑞穂の言うとおりの展開すぎて、逆にこえーよ。
「ユウジ、宮野小路とデート・・・。」

「ちがう！」
「密会？」
「断じて違う！！」
「逢い引きだったら許さない」
「違いすぎるし、なんでおまえの許可がいる！？」
「妻の目を盗んでの悪行・・・」
「違いますよ、坂本夫人。これこれ・・・」

瑞穂が何かを差し出すと、翔子は興味深げに見た後で、なぜか機嫌良さそうな雰囲気になった。

「おい、瑞穂、なにを仕掛けた？」
「・・・人聞きが悪いですね。これを見せただけですよ」

それは近くの神社の夏祭りの広告だった。
花火大会までやるというのは気が利いている。

「これで、みんなが離れるので、夫婦水入らずの思い出を、と囁いただけです」
「おめー、瑞穂ぉ！　やっぱり敵だな、敵なんだなぁ！？」
「はははは、感謝はいらないですよ？　結婚式と披露宴に呼んでくれればいいです」
「宮野小路、いい人。絶対に友人代表決定」

ええ、ええ、すでに明久たちと一緒にテントウムシのサンバの練習をしてますから。

「みずほーーーーー！！！」

感謝の声は気持ちいいですね～。

別名「るーずどっくの泣き声」ですか？

翌日の海も楽しいひと時で。
今はデッキチェアで一休みのお嬢様方。

「いやー、瑞穂ちゃんの所は波乱万丈だねぇ」
「楽しい方々ばかりですわ」
「是非とも、その風を送って欲しいものですね」

まぁ、変人変態が多いことは否定しませんよ。

「いやー、楽しいとは思うけど、お勧めはしないかなー」
「そうね、物珍しいのはわかるけど、迷惑はその比じゃないわ。付き合う時間に比例して迷惑が増える連中よ」

工藤さんも優子さんも手厳しい。

「だよねー、なんか男子っていうよりも、男の子って感じじゃない？」
「・・・それがいいところ」

マリヤの一言に切り返す坂本婦人。
流石、妻は強い。

「ところで、瑞穂さん」
「はい、なんでしょう？」

「あの方たちは何をしていますの？」

・・・答えづらいですねぇ。

「そうねぇ、アキたちが何をしているか、興味あるわよねぇ」

「明久君・・・・」

あちゃー、なんであいつらはこっちの視界の範囲で「ナンパ」なんかするかなぁ。

そんなに命がいらないのでしょうかねぇ？

「アキくんたちには其れなりの教育が必要ですね」

「ふふふ、明久君には単なる体罰では「もう」ききませんよ？」

黒い、黒いよ楓さん怜さん・・・・。

「「「「「ふふふふふふふ」」」」」

ああ、明久、そして男達。

その命燃え尽きたものと知るが良い。

「あ、瑞穂ちゃんと秀吉君も連座ね」

「理不尽です！！」「あんまりじゃ！」

明久サイド～

なんだろう、今日はスゴく運がいい。

昨日、姫路さんの料理で「厄」落としが出来たのかもしれない。
朝御飯もおいしかったし、芦原さんの知り合いの、年頃の女の子も紹介してもらえたし、メールアドレスまで交換できたんだ。
もう、誰が一番のイケメンとかそういうのは関係なくて、そう、みんなが勝者って感じだった。

・・・はずだった。

明久サイド終了〜

「なぜこうなった・・・・・。」

ナンパをあの砂浜でしてたからです。

「・・・ちゃんと謝ったのに」

責められるまでシラを切ってましたよね？

「・・・・何で女装なんだ！　明久や瑞穂や秀吉ならまだしも、何でおれや土屋君（ムッツリーニ）まで！！」
「主犯はお主等じゃろうが！　わしらは関係無しで巻き込まれたのじゃぞ！？」

明久を見習いなさい。
アキちゃんとしてキャラ作りを初めてますよ？

「瑞穂、あれは現実逃避じゃ」

女性陣の前でナンパをしていたという事で、男性陣は女装でミスコンに放り出されてしまいました。
秀吉とマリヤ達という無駄にメイク力があるチームがいたせいで、ふつうに女の子に見える格好です。

あまりにも悔しすぎます。

「ねぇ、このまま瑞穂ちゃんを出すのって、なんか反則っぽくない？」
「ですが、化粧無しでも十分優勝格ですわよ、マリヤさん」
「・・・私によい考えが」
「紫苑様？」

女物の浴衣を押しつけられた後、なぜが僕だけ呼び戻されました。
恩赦かなーと思ったんですが、さらに酷いことに。
渡されたのは、ハッピ、さらし、詰め物、ホットパンツ。

「何の罰ゲームですか！！」
「えー、似合うと思うけどなぁ」
「さらしと詰め物は余計です。Tシャツで十分でしょうが」
「それだとチラリズムが足りないのよ～」

僕はマリヤ、君の言っていることが、理解できません。

無事というか、呪わしくと言うか、男子全員予選通過しました。

・・・なんでさ？

とはいえ女子のメイク技術は恐ろしい。

明久：天然系純情少女
ユウジ：ジョバレ系スポーツ少女
土屋君（ムッツリーニ）：内気系純情少女
秀吉：かわいげのある優子さん

明らかにＳＦＸの世界ですね。

「・・・瑞穂、あんた今、殺意を覚えるようなこと考えなかった？」
「まっさかー」

危ない危ない、死亡フラグでした。

そんなこんなの本戦でしたが、ユウジがステージにたったところで審査委員が暴走＋求婚したところで坂本夫人が乱入。
大騒ぎのうちに中止になったのでした。

僕と秀吉はステージにあがらず済んでセーフ。

そんな海のヒトコマでした。

第二十話（後書き）

おまたせの海編終了です。

で、夏休み恒例ネタをはさんだ後で、そろそろ話は、動きますw

次回「Gの逆襲」を、おたのしみに！！

・・・うそですw

第二十一話（前書き）

オリジナルもオリジナル、ちょーオリジナルですw

第二十一話

十條紫苑さんが入院した。

プールや海では結構元気だったんだけど、あれは稀な事で、彼女は一年の殆どを入院しているという。
そんなピンポイントで体調がいいときに僕たちは誘えているそうで。
だから元気な姿しか知らないけど、でも、僕は彼女から色々なものをもらった。
だからお見舞いに生きたいとマリヤに言うと、彼女も了解してくれた。
電話口のそばにいた明久も同行することになり、野郎二人の来訪となった。

「や、やっぱりお土産があったほうがいいよね！？」

鉢植えの花を買おうとしたので、マリヤと僕でタコ殴り。
さすがに反省して明久の全力で良い物を買おうとしたらしいのだけれども、そのことごとくがダウト物ばかりというヒット率に泣けた。

まぁ、心臓関係と言うことなので低カロリーでおいしく感じる食べ物か、本とか写真集とか・・・・

「ん？　なんで写真集？」

マリヤが首を傾げるので、僕は鞄方一冊の写真集を出した。

『お姉さま喫茶のあきちゃん』

監修は玲さん、撮影は土屋君（ムッツリーニ）。

校内及び周辺地域で絶賛の写真集だ。

「だめー！　それだめーーーー！」

無言で明久を足蹴にするマリヤは、全編読み尽くして親指を立てる。

「さっすが瑞穂ちゃん。わかってるぅ～」

うんうん、マリヤも判ってますね。

明久、僕の足にすがりついて泣かないように。

すでに回収不可能なまで売り上げしてるんですから、あきらめなさい。

「ひ、ひどいよ、ひどいよ、瑞穂！　これじゃぁ、僕は本物だって思われちゃうよぉ！」

本物か偽物かと言えば「本物」ですよ、あきちゃんは。

「そんな本物になりたくないよぉ！」

あ、そうそう。

写真集のバックマージンはこんな感じです。

「・・・・・・・・・・・・」

どうやら涙をのむことにしたようですね。

うんうん、正しい説得の仕方ですね、うん。

「瑞穂ちゃん、こわい子」

マリヤ、そんなに「ＭＭＲ」な顔をしないでください。

ほらほら、明久もまねしてるじゃないですか。

頭の弱い子なんですから、ね？

いつもは陰鬱としている病室が、ぱっと花開くかのような明るさを示した。

それはたぶん、瑞穂ちゃんと吉井君のおかげ。

今すぐ死ぬって病気じゃないけど、紫苑さまのご病気はオペをしないと治らない類のものだ。

そしてオペまでの猶予時間は刻一刻と少なくなっているのが現実だった。

すぐには死なない。

しかし、確実に悪くなっている。

この事実は紫苑様の心を重くしていた。

が、先ごろからの文月学園、瑞穂ちゃんたちとの交流によって、紫苑様の気鬱は晴れていった。

ここまで効果的だとは思わなかったけど、それでも、まっすぐ前

を見つめるだけの気力を引き出せるようになっていたのだ。
でも、ここにきての病状急変は気鬱の再発に十分で、このまま入院生活に突入してしまいそうな勢いだった。

まずい、と思った。

そんなわけで、最近の特効薬に渡りを付けると、気軽にきてくれる話になった。
瑞穂ちゃんもそうだけど吉井君もかなりのお人好しで、病室には行ってからこっち、紫苑様の顔から気鬱や諦観の色は払拭された。
逆に「うちの学院祭までには退院しませんと、ご案内ができませんわね？」とかいって、前向きになっていた。

うれしかった。
本当にうれしかった。

十條紫苑様をエルダーに推挙した一人としては、何とか立ち直って欲しかったから。
エルダーに決まった責任はない。
しかし憧憬を一身に集めると言うことがどれだけ重いこと何かを理解していなかった私にも責任が大きいだろう。
しかし、彼女には、たっていて欲しかった。
これは個人的なわがまま。
だから、紫苑様の、お姉さまのわがままも聞き入れたいと心から思っていた。

明久さいど～

なんというか、美人というのはどんな格好でも美人だなぁ。
うん、かぶりものをしても美人は美人だろうなぁ。

「・・・明久、これを」
「あ、土屋君（ムッツリーニ）、さんきゅ・・・・・」

猫耳カチューシャを受け取って気づく。
なんでここに土屋（ムッツリーニ）が？

「・・・あ、あれ？　瑞穂。ここに今、ムッツリーニがいなかった？」
「へ？　一緒にきたのは明久だけですよ？」

そ、そうだよね、あはははは。
って、じゃぁ、この猫耳カチューシャはぁ！？

「あ、吉井君、おもしろいもの持ってきたね？」

御門さんがカチューシャをつけると、再びムッツリーニ発生！
数枚写した後、再び消えた。

「・・・土屋君（ムッツリーニ）。今すぐでてこないと、潰しますよ？」

鬼や、鬼がおれれはるぅ・・・・

思わずガタブルする僕たちの目の前にムッツリーニが現れた。

「・・・十条さんと、あきちゃんの猫耳プリーズ」

素直だ、そして積極的だ！

「販売しないならいいでしょう」

「・・・・っく、了解した」

血の涙を流すほど悔しがったムッツリーニによって、本日の楽しい思い出が写真になった。

十条さんも御門さんもうれしそうにしてくれたのが印象的だった。

「・・・ところで、吉井さん」

「はい？」

「・・・写真集の第二段を期待してますね？」

「うわーーーーーん！」

明久さいどえんど～

うーん、紫苑さんも上級者だなぁ。

明久いじり検定。

今度検定本でも作ってみましょうか？

第二十一話（後書き）

おひさしぶりのバカボク、いかがだったでしょうか？
オリジナル展開＋オリジナル内容ですが、結構バカテスしてたんじゃないかと思います。

次話は執筆中ですので、あまり時間を空けずに投稿できると思います。

第二十二話（前書き）

閑話っぽい話です

第二十二話

瑞穂がアルバイトをしていることは結構有名だが、その店がどこ何かは知られていない。
というか、ロイヤルガードの秘匿情報扱いになっている。

まぁ、俺らはしってるけど。

瑞穂がアルバイトしている先は、和風の喫茶店で客層が濃い。
俺ら仲間内はまぁいいとして、いや、それも濃いのだけれども、それ以上に恐ろしいのは「教師」が多いことだろう。
喫茶店の店主である老夫婦が、実は鉄人の恩師であることが判明して以降、俺たちの担任が鉄人であることや、同僚教師が出入りしていること等々で親交を深くしていた。

だから瑞穂の試験欠席にはひどく責任を感じていたけど、親友ともいえる友達たちと同じクラスになれたんだから逆に嬉しいと言ってくれたらしい。
これに感動した老夫婦は、瑞穂を養女に迎えたいと強く要望したが「僕は男です！」という反撃を受けて言い合いになり、いつもその話が立ち消えになると言うことが続いているとか。

すげーぜ、瑞穂。
兄弟子は違うぜ、ふぅ。

この店の良いところは、紅茶がうまいことだ。
和風ってだけで本場形式のイングランドティーが飲める店として、蔭ながら有名だったりもする。

純和風の店内に、純和風の店員。
で、和洋折衷のメニューというのが日本らしいんじゃないかと思う。

「あら、坂本。また逃亡？」
「人聞きの悪いこと言うんじゃねぇ」

この不良店員、瑞穂の推薦でバイト採用された島田だった。
夏休みに入ってバイトを探しているという話を聞き、即座にヘッドハンティングしたとのことだった。
なんでだ？　と聞いてみると、

「思いの外、浴衣が似合ってましたので。和装の制服が似合っていると思ったんですよ」

とのことだった。

なるほどの論理的。
実に分かりやすい話だった。
なるほどな、帰国子女であるにも関わらず、島田は・・・

「いま、瞬間的に坂本夫人に電話したくなったんだけど？」
「・・・その表現はよせ」

瑞穂が広げた噂のせいで、うちの母親までその気になっていやがる。
くそ、唯一の安らぎの場がここなのに。

翔子はなぜかこの店に来ないので、逃げ場としては最適なのだけど、いつ失われるか判らない危機感が怖い。

正直な話をすると、懐が寂しいのは妙な出費が多かったから。
いや、本当に正直に言うと土屋商会へ流れた。
もう、これ以上内ほどの事実だけにぐうの音もでない。
さらに、これからの季節がらやら向こうさんの学院祭や等がある
ことを考えると、いくらあっても足りないという恐怖を感じる。
葉月へのお土産代も稼がないといけないし・・・。
ああ、瑞希って毎月どうやって暮らしてるのかしら？
本気で疑問だわ。
ウチ並に買ってるのに・・・。

「美波、オーダー」
「はいはい、瑞穂、了解」

今はお仕事お仕事～

「おねーさま！　なぜウチにきてくださいませんのぉ！？」

はいはい、ぱすいち～

「ウチにきていただければ、２４時間勤務で付きっきり日当ですのよぉ！」

どこの労働基準法よ？

「はいはい、清水さん。それ以上騒ぐと、法律的には全く問題ないけど再起不能になる目に遭いますよ～」
「も、も、申し訳ありませんでしたぁ・・・」

いやぁ、瑞穂のおかげで、安心したバイト生活ができるわぁ。

「・・・あきらめませんわぁ・・・」
「あんた、そろそろ出入り禁止になるわよ？」

血の涙を流す美春をこんなに安心してみていられるこのバイト先は貴重だわ。
・・・うん、末永く世話になろう。

最近、僕のバイト先がFクラスか職員室かという感じになりつつある。
で、これで雰囲気が悪くなると「生徒指導室」になったりするんですが。
とはいえ、常連の明久がいないので雰囲気は半減ですね。

「宮野小路、なんか不穏なことを考えておらんか？」
「まさか、西村（鉄人）先生」
「・・・おまえも「F組」なんだな」
「あったりまえじゃないですかぁ」

あははは、と笑顔と共に紅茶のお代わりを入れる。
この店では、葉っぱがダメになるまでお代わりができるシステムになってる。
まぁ、ふつう「2〜3」杯なんですがね。
明久クラスがくると色がでなくなるまで粘るのがいじましい。
もう、白湯でいいじゃないですか、というと「香りがあるからまだ紅茶」とか譲らないのが悲しい。

「そういえば、明日の登校日はくるんだろうな？　宮野小路」
「・・・・・」
「サボればペナルティーがあるぞ？」
「いやだなぁ、そんなものなくても行きますよぉ・・・（店長、明日のシフト、美波と僕はだめでしたぁ）」

やっぱりという目で西村（鉄人）先生がこっちをみてます。
ま、まさか、見破られたとでも？

「まぁ、吉井は登校日の存在すら忘れているだろうから、連行してこい」
「うっわ、命令ですかぁ？」
「連帯責任という単語が実行される」
「もちろん、逆さ吊りにしてでも連れていきますよ？」

うんうん、連帯責任。
絶対に聴きたくない単語ですねぇ。
でも、共犯という言葉は大好きですね。
うん、良い言葉です。
座右の銘は「完全犯罪」、それが宮野小路瑞穂です。

「そんなわけで、逃げたら呪いますよ、ユウジ」

「・・・いくに決まってるだろうが」
「ＦＦＦ団にも連絡よろしくします」
「とりあえず、「あの」写真を使うぞ」
「あきちゃんの猫耳とマリヤの猫耳までならＯＫです」

心温まる交渉でした。

第二十二話（後書き）

てなかんじの夏休みの一コマでした。

本作では美波はバイトをしていますが、それもこれもすべて商会のせいですw

第二十三話（前書き）

事件のプロローグですねw

そんなわけで、ちょっと短いです

第二十三話

さて、地獄の行軍、といいましょうか。
暑くて効率が悪いからという理由で夏休みがあるはずなのですが、現在、登校日というなの灼熱地獄の中の登校をしています。

「瑞穂、おはようなのじゃ」
「秀吉、おはようです」

にっっこりほほえむ僕たちですが、額の汗は拭わざるえません。

「とはいえ、G組に比べれば、まだいいですけどね」
「すでに瑞穂の中では「G組」なんじゃなぁ」

あ、いけないいけない。E組でしたよね？多分。

「・・・えーっと、そう、E組はFに負けたってことで、夏休み中夏期講習をあの部屋で、ですからね。いかに恵まれているかを感じますよ」
「聞いた話じゃと、教師もあの教室に行きたくないから、自習ばかりじゃとうが、ほんとうかのぉ？」

いささか可哀想に感じますが、まぁ、自業自得でしょう。
あの試召戦争を黙って過ごせれば、今の立場になることはなかったのですから。

「みやのこうじーーーー、すきじゃぁーーーーー」

シネ。

旋風脚で吹っ飛ばし、電信柱にたたきつけると、周囲から拍手が巻き起こる。

「いやー、これがないと学校にきた気がしない」「休み中は寂しかったねぇ」

ご近所様にも評判らしい。

「あ、秀吉、瑞穂～」

つったか走ってきた明久をみて、近所のみなさまも歓声を上げた。

「「「「「あきちゃんだー！」」」」」

「うわーーーーん」

「逃がすな者共、ひっとらえろ！」

「「「「「承知！！」」」」」

ＦＦＦ団のみなさんも巻き添えで罰を食らうのは嫌らしいですね。

「よぉ、瑞穂」

「あ、坂本夫妻、おはようございます」

「坂本夫妻、おはようなのじゃ」

「・・・勘弁してくれ」

あのユウジが半泣きです。

「坂本夫人、勝利はつかんでおりますよ？」

「・・・宮野小路、がんばる」
「だから、焚き付けるなっていってるだろうがぁ！」
暑苦しく叫ぶユウジの背後に級友迫る。
「うらやましいです」「ウチにも宮野小路の全面バックアップがあれば・・・」
はいはーい、坂本夫人は告白済みですよ～。
で、おふたりは？
「ぐぅっ！」「うぅっ！」
僕の問いに押し黙る二人。
まぁ、そういうものですよ、ええ。

登校日なんてもんは、出てこなくてもいいはずの日だ。
が、担任が強制的に出られるように調整しやがった。
家や家族に連絡したり商店街へ手を回したり、友人知人の手を使ったり。
あきらかにオカシい手口だった。
あまつさえ、Ａ組の翔子まで使うその手口は異常だった。
なんとしてでも狩り集める、そんな意志を感じていたのだが、淡々と時間はすすみ、すでにＬＨＲな時間になった。
が、それは起きた。

「坂本、吉井、土屋、木下、島田、姫路、宮野小路、今呼ばれた者は学長室に行くように」

やはり、何かありやがったか・・・。

「吉井と坂本を逃がすな！！」

ちぃ、ねらい打ちかよ！！

「ユウジ、どうせ捕まるんだから、あきらめろよ！」

「明久、それはお前のことだろうがぁ！」

くそ、明久がじゃまで出れねぇ。

一気につぶすぞ！！

バカ二人がダブルノックアウトになったところで、僕たちは学長室に移動した。

もちろん、後の騒動は約束された未来だったと思います。

第二十三話（後書き）

うちの瑞穂ちゃんは真っ黒けですw

事件は微妙に本編ポイ内容でありながらずれている内容が展開する予定です。

第二十四話（前書き）

えー、なんだか全然横道のそれてしまったw

短いですが、お楽しみいただければ幸いです。

第二十四話

「これより、スール会議を開催します」

闇に包まれたその部屋には、一種の熱気がこもっていた。

「商会から提供された写真をこれより表示しますが、このスライドを直接携帯で撮影することを禁じます。違反した場合は、除名処分が行われますので、そのつもりで」

厳しい声に対して、「是」の意志が響く。

映し出される画像に息を呑む影たち。

片手の携帯電話を持ち上げたいが、それは除名と引き換え。

必要であれば正式ルートで手に入れるしかない。

いや、手に入れること事態は問題ない。

しかし欲しいのは凡百の映像ではないのだ。

レア、そう、レア写真が欲しいのだ！

「まず、今回の議題、共学高校生を迎えるにあたっての問題点・・・・」

かの英雄、厳島貴子様が招き入れたという共学高校男子枠。

エルダーシスターの信任も得て、運動部連合と文化系連合会すら取りまとめた御門マリヤ様の協力のもと、この会議が開かれています。

「・・・と、以上のような注意点は、主に一般男子生徒に向けたも

のです」

司会役が一息付いたところで、スライドが切り替わりました。
一段目は、共学高校からの参加女子。

「勧誘ナンバー1、島田美波様」

ポニーテールの彼女の来歴が語られ、推薦者の理由が続く。
彼女自身、彼氏にしたい女子ナンバーワンという評価があり、同級生にすら「お姉さま」と呼ばれるほどのシスター力を持っている。
彼女たちの高校で行われた文化祭での「お姉さま喫茶」での姿を映しだした瞬間に、下級生の何人かが落ちた。

「勧誘ナンバー2、姫路瑞希様」

続いて映し出された彼女に対しては、説明不要だろう。
成績優秀であり性格も良好。理事会からも「とってこい！」と指令があったぐらいだから。
が、私たちにははずせない特徴。
あのFカップの生成と維持に関する技術供与を望む！！！
全会一致の声だった。

「勧誘ナンバー3、吉井明久様」

彼の写真をみて、周囲がどよめく。
どうみても男性。
どうやっても男子生徒。
なぜ？

その疑問があかされぬまま、次の写真にうつり、納得した。

～ああ、なんだ、あきちゃんか、と

『え、え、え、？なんで？　何で納得なの、なんでぇーーーー！？』

あれ、幻聴が聞こえたみたいですね。

それはさておき、私たちは次の写真に移る。

「勧誘ナンバー4、木下秀吉様」

ああ、この人は今更。

すでに年数回単位で移籍交渉が行われていますし。

「勧誘ナンバー5」

瞬間、周囲は静寂に包まれました。

そう、この方こそ本命。

そう、この方こそ、最大勧誘対象！

「・・・宮野小路　瑞穂様」

かのお方の写真が写った瞬間、失神した下級生まででる。

そう、今回の勧誘作戦において、最大目標こそ宮野小路瑞穂様。

厳島貴子様の恩人であり、御門マリヤ様の幼なじみ。

お姉さま力判定不能の最大戦力。

彼女自身、上級生からも下級生からも「お姉さま」と呼び慕われ、

専門の護衛組織「ロイヤルガーダー」なるものまで存在する。

「実は、瑞穂様自身は否定なさっていますが、本校への入学のお話もあったのですが、肉親による説得が失敗しており、文月学園へご入学なさった経緯がございます」

おお、と声が響く。

「ですが、このたびの御来校は一つのチャンス。我らスール会議の全力を持って、我らの学びやにお招きしますわよ！！」

「「「「「おおお！！！」」」」」

「いやー、燃え上がっちゃったねぇ」

「当たり前ですわ。瑞穂さんと校舎をともに出きる喜びのためならば、いろいろとさせていただきますわ」

「ふふふ、貴子さん。私の方もお願いしますね？」

「解っておりますわ、お姉さま」

「「「ふふふふふ」」」

で、この奇妙な召還はなんですか？

学園長室で試召獣を召還したところ、変なものがいっぱい現れました。
明久は「デュラハン」。
姫路さんは「バンパイヤ」。
美波は・・・「ぬりかべ」。

やばすぎです。
というか、なぜか明久が血塗れです。

で、私も召還してみたんですが、見た目はいつもと変わりませんね？
いや、なんかコウモリっぽい翼と尻尾があります。矢印の。

「ああ、なるほど、虫歯のばい菌、バイキンマンですね」
「「「「「悪魔だ悪魔！」」」」」

おお、一同総つっこみですか、驚きです。

「やっぱ、調整ミスかね？」
「そうみたいですね」

藤堂カオル先生は苦笑い。

「もしかして、これの試験運用のために呼ばれたんですか、僕たち」
「ふん、普段バカなだけに、そういうことにはカンが巡るみたいだね」
「なんという、ひどい言葉！　撤回してくださいババァ長！」

明久、君もずいぶんだから。

第二十四話（後書き）

おひさしぶりの瑞穂ちゃんでした。
さほど黒くないっすねw

第二十五話（前書き）

ざっくり短めw

第二十五話

召喚獣の調整は色々とつき合わされました。
何しろ、そのデーター収拾に付き合えば、テストは無理ですが成績表に手を加えてくれると聞けば鼻息も荒くなるわけで。
明久なんかやる気満点です。

「んー、この古今東西妖怪編は面白いね。イベントのときにでもやるか」
「では次に合成召喚獣ですね」
「「「「「合成？」」」」」

なんでも、生徒二人でその特徴を合成した召喚獣をシュミレートするとか。
語感では「趣味」レートに聞こえるのが危険なカオリですね。

「まるで子供をシュミレートするみたいですね」

面白がった僕の台詞に、藤堂カオル先生はニヤリと笑う。

「ああ、間違ってないよ」

瞬間、二人の女子が明久に掴みかかります。
もちろん、ユウジは坂本婦人に捕まってます。

「「アキ（明久君）！、私と実験（がったい）しましょう！！」」
「ぶしゅーーーーー！」

ああ、明久が返事する前に土屋君（ムッツリーニ）が倒れました。

確かに衝撃的な台詞ですからね。

「とりあえず、どうやるんですか？」

「特殊フィールドを発生させるから、その中で二人同時に召喚すればいいさね」

じゃ、初めは坂本夫妻で。

「宮野小路、さすが」

「なんでだ！！！」

当然のように坂本夫妻が召喚すると、ちょっときつめの顔の女の子が召喚されました。

口では嫌がっていましたが、子供が縋りつくとデレデレになり、ユウジもいいお父さんといった感じで。

これは逝けますね、録画は？　さすが土屋君（ムッツリーニ）！！

そんな姿を幸せそうに見つめる坂本婦人。

まったく素晴らしい調整です！！

「さ、やるわよ！！」「まってください、ミナミちゃん！！」

「「サモン！！」」

あ、なぜかF組み女子二人の召喚。

同性でもいいんですか、そうですか・・・・

というか、明久の保健体育履修範囲ストライクな女の子が召喚されましたね。

巨乳、ポニテ、甘い笑顔、気弱そうな笑み。

むー、なんか危険な気が・・・・

「ぶしゅーーーーーーーーーーーー！！」

更に盛大な勢いの土屋君(ウッツリーニ)。
まだ体の中にそれだけの量を保有していましたか・・・。
凄いですね。

同性でも出来る、という話をどこからか聞き取った某スールが乱入してきたりしましたが、まぁ、いつものことですね。

「宮野小路は試さないのかい？」
「成績は十分ですよ？」

どうやら面白映像で欲しいとか考えているみたいですね。
じゃぁ・・・

「明久、試してみますか？」「うん」
「「サモン！！」」
「「あああああああああああああ！！！」」

某女子二人の絶叫が聞こえますが無視ですね。
争わないで、順番に試せばいいのですから。

「「「「「おおおおおおおおお」」」」」

見れば、何となく明久に似ている僕の子供姿って感じで。

「なんか、瑞穂に似てる僕って感じが・・・」

思わず二人で同じようなことを考えていたらしく、同時に笑ってしまいました。

「ずるいです、ずるいです、宮野小路君、ずるいです！！」
「ひどいわ、瑞穂！！　抜け駆けよ！！」
「「「えーーー？」」」

思わず僕と明久と召喚獣が同調しちゃいました。

「「「「「か、かわいい」」」」」

まぁ、この年代の幼児は、特有の可愛さがありますよねー。

「あ、アキ！　わたしとも！」「明久君、わたしとも！！」

「はいはい、順番でしょ？」「でしょ」

あ、召喚獣がまねっこですね、少しかわいいですね。

「「「「「う、かわいい・・・」」」」」

うーん、明久のかわいさがベースだと、全員直撃ですね、うん。

「んーーー、こりゃ、おもしろすぎるかね？」「おすすめです」

おまけ

「会議中失礼します！」
「なんですか、乙女にあるまじき・・・」
「お話はこれを見た後で！」

スライドに映し出されたのは、明久っぽくありながら瑞穂っぽい幼児な召喚獣。

「「「「「ぶばーーーーーー！！」」」」」

某秘密会議会場は、血の海になっていたのだった。

第二十五話（後書き）

実は結構この話が好きです。
主に、某所の血の海ｗ

１２／０６　一部修正～

第二十六話（前書き）

えー、呼び出された話の続きです。

第二十六話

さすがに合成召還獣はいろいろと問題がでたので終了し、あとは操作性をあげた調整を試そうという話になった。

「操作性向上ですか・・・」

今までも悪かった訳じゃないけど、なれない状態で操ると強く意識した動きしかできない。

まぁ、無意識に考えたことで暴走するのも考え物だけど。

それでも、試験召還なんて特殊ケース、明久ぐらいしかなれてる人間いないし。

そういう意味では、バカの代名詞も面白い立場かもしれません。

そんなわけで、土屋君（ムッツリーニ）と島田さん、そして秀吉が試召獣を召還したんですけど、思いっきりパニックになりました。

いわゆる本心を、ぺらぺらしゃべり出すのですから。

まず、隠すことのないオープンエロ状態の土屋君（ムッツリーニ）。

最近、校外の男子学生どころか中学生や小学生男子にまで告白されている秀吉。

そして、下級生女子どころか校外の女子にまでお姉さま扱いされている島田さん。

「・・・不幸な事故ですね」

「「「人災だから！！」」」

それでも、あの秀吉が自分の試召獣をゴミ箱にダンクシュートするだなんて狼狽を見られるのはなかなかレアですね。

「ウチらばかりひどい目にあうなんてずるいぃ！！！」

「明久も召還するのじゃぁ！」

ふたりがかりで明久につかみかかりますが、さすがに明久だって自分の身がかわいいでしょう。

まぁ、彼の場合は正直すぎるので、呼ぼうと呼ぶまいと変わりませんが。

『アキ、だっこ～』『わしもだっこしてほしいのじゃ～』

ゴミ箱から復活した二人の試召獣は思いの外、本能暴走気味の様子。

といいますか、秀吉、明久に結構かまってほしそうですね。

「だっしゃーーーー！！！」

男気あふれるダンクがゴミ箱に決まりました。

顔真っ赤ですね、秀吉？

「瑞穂も召還するのじゃ！！」

「いいですけど、本気の本気の本音でしゃべりますよ？」

「・・・すまん、忘れてくれ」

そうこうしているウチに明久もユウジも召還してしまいました。

・・・あ、明久らしくもなく頭脳戦で競り勝って、姫路さんも召還させましたね。

うっわー、えげつない攻防です。

「さぁ、瑞穂、あんたも一緒に不幸になるのよ？」「さぁ、瑞穂さん、いっしょに不幸になりましょうよぉ～」

ハイライトの消えたＦ組女子の魔の手で、僕も召還させられてしまいました。

～明久サイド

あああああああ！

おなかの中まで真っ黒な瑞穂に召還させてしまったぁ！？

あの、普段から真っ黒な瑞穂の本音も気になるけど、絶対再起不能になるに決まってるんだ、主に僕らが！！

「もう、勘弁してくださいよね」

「あははは、でも、宮野小路君ってミステリアスだから、いつもなにを考えているのかなぁって・・・」

『それはもちろん、法律に抵触しない、それでいて一生もののトラウマになるような復讐法を２０個単位で考えています』

「「「「「「・・・・・」」」」」」

「こらこら、本心を素直にはなしてどうするんですか。ここはにっこりほほえんで「ひみつ」って言うものです」

『ああ、そうでした、これは失言です。ひみつ、です。あ、そうそう、この場の失言が外に漏れたら、なぜか不幸になる人がでるかもしれませんね』

「その言い回しはいいですね、直線的ですが」

『わーい、ほめられたぁ～』

ぴょこんぴょこん、と愛らしく跳ねる瑞穂の試召獣。
絵ズラだけだとかわいいんだけど、冷や汗が止まらないよ、瑞穂！！

ともあれ、Ｆクラスを恐怖のズンドコにたたき込んだテスト召還は終了した。
あの本音を言う試召獣のとき、瑞穂だけは召還させないと、僕ら全員が心に誓っていた。

～明久サイドｅｎｄ

「あ、坂本夫人～」『さかもとふじん～』

「って、おめえ！　心の底からそういう発言してやがるのかぁ！？」
「？」『？』

「その、不思議なものを見るような視線をやめろぉ！」

第二十六話（後書き）

というわけで、そろそろ、文化祭の話しに入ります。

おたのしみにw

ああ、そのまえに、球技大会で色々とやってもらわないとw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0969m/

バカとテストと乙女なお姉さま（ぼく）

2011年12月18日10時00分発行